

中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集

たいら

平遺跡群

しもしつたか

すがた

下尻高遺跡・管田遺跡

1988.1.2

中之条町教育委員会

中之条町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集

たいら
平遺跡群
しもしつか
下尻高遺跡・管田遺跡 すがた

1988.12

中之条町教育委員会



下尻高遺跡全景



下尻高遺跡調査区全景



下尻高遺跡 2号住 空中写真



石組煙道内部



石組煙道付かまど

作業風景
人と較べかまど、煙道の大きさが
わかります



◆下尻高遺跡 1号住（南から）
東壁にかまどがあり南よりに炭化
材と焼土が集中しています

下尻高遺跡 1号住
▶
黒い炭化材の上に厚く焼土がのり、
焼土の上に白く灰になったカヤ（？）
材がある。平安時代の土屋根の状態
を示しています。



序

中之条町は群馬県の西北に位置し、上信越高原国立公園の山々に囲まれ、自然と清き水に恵まれて、名湯で知られる四万温泉、沢渡温泉のあるところです。国指定重要文化財である日向見薬師堂、富沢家住宅をはじめとし、県指定、町指定の史跡、文化財が多く、いまだ土の下に眠る埋蔵文化財も数多くあります。

近年、営農の近代化と農地の効率的利用を図るために土地改良事業が盛んに行なわれていますが、このたび平地区土地改良事業に伴い道路部分について記録保存のため、発掘調査を実施いたしました。当地は以前より埋蔵文化財包蔵地と周知されておりましたが、今回の調査で予想以上の成果を上げることができました。

平遺跡群は縄文時代から近世までの複合遺跡で、今回は弥生時代から中世の建物跡、遺物を調査することができました。中でも古墳時代の竪穴住居跡では立派に石で組んだ煙道を持つかまどが見つかり、平安時代の火災を受けた住居跡からは、垂木を結んだ繩をはじめ、焼けた多くの建築材が発見され、古代の建物を解明する貴重な資料を提供してくれると共に、私たちに祖先の知恵と努力を教えてくれます。中之条町の祖先の歴史や生活を具体的でイメージ豊かに解明するとともに、次期の各種調査研究に役立つことを考えれば、まことに意義深い成果であると言えます。今回の調査は古代集落の一端であり、未調査部分により多くの遺構、遺物があることは充分予測されます。解明されたことは多いと同時に新たな課題も多いと言えます。

中之条町には祖先が開拓し発展させてきた歴史の遺産がたくさんあります。これらの文化財を私たちの生活に生かすと共に、その保護に力を注ぎ、町の文化発展との調整をはかることが大切です。本書がそのための一助となり多くの方々に活用されることを念じてやみません。

この調査を実施するにあたり御指導、御協力をいただきました関係各位に対して厚く御礼申し上げます。

中之条町教育委員会

昭和63年12月

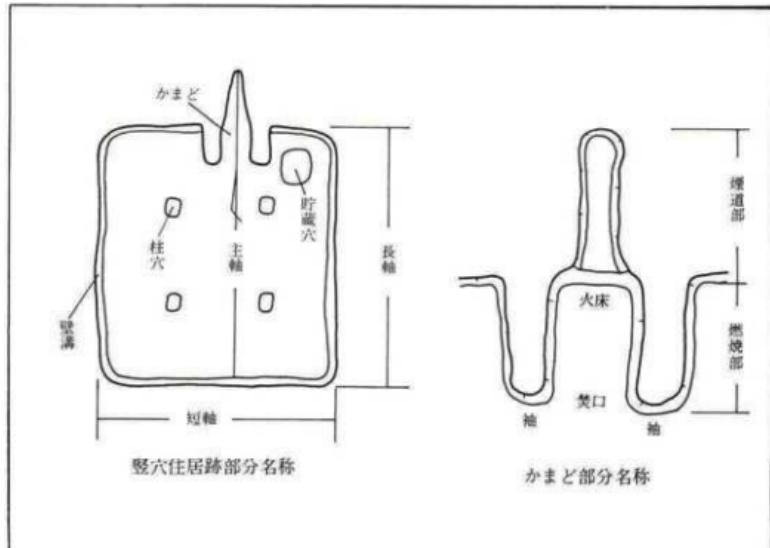
教育長 一場 秀司

例　言

1. 本書は、昭和63年度、64年度平地区土地改良事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は群馬県教育委員会の指導を受け、中之条町教育委員会が長谷川福次を臨時職員として調査員として実施した。
3. 遺跡名は下尻高遺跡・管田遺跡とも小字名を用いた。
4. 調査面積は下尻高遺跡 650 m²、管田遺跡1220m²である。
5. 整理作業は長谷川、清水夏子、金井フキ江、斎藤君代があたり、福田義治の協力を得た。
6. 本書のⅠは田村宏司が、Ⅱを早田勉（パリノ・サーヴェイ株式会社）が執筆し、他の執筆と編集は長谷川が行なった。
7. 遺構実測は株式会社測研に委託し、遺物実測は、長谷川、清水、福田が行なった。遺構図、遺物図のトレースは株式会社測研に委託した。
8. 遺構、遺物写真は長谷川が撮影し、空中写真は株式会社測研に委託した。
9. 土壤分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
10. 発掘参加者は下記の通りである。
剣持富蔵、星野 仁、山田一男、星野 墉、山田武雄、清水夏子、清水茂子、金井フキ江、斎藤君代、小池せつ子、山田正子、伊能町子、斎藤ね、小淵幸子、吉田むつ。
11. 発掘調査から本書作成にあたって、多くの方々に指導、助言、協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。
神保郁史、巾 隆之、石井克己、井川達雄、能登 建、早田 勉、高橋利彦、山口武夫、岩田芳明、本間 泉、大塚昌彦、
福島真一、福島 茂、福島清一、角田邦友、剣持隆夫、角田若一、桑原 勇、剣持澄夫、剣持千代松、剣持潤次、小池光利、星野 仁
群馬県教育委員会文化財保護課、吾妻町教育委員会、子持村教育委員会、沼田市教育委員会、渋川市教育委員会、町農林課、株式会社測研、パリノ・サーヴェイ株式会社
12. 遺物及び写真、遺構図、遺物図等の資料は一括して中之条町歴史民俗資料館で保管している。

凡 例

1. 造構図中の断面基準線は標高で表わし、座標は国家座標区系を用い、座標値は実測図中に示した。
2. 造構図は住居跡60分の1、かまど30分の1、溝120分の1、土塙60分の1を原則としたが、そうでないものもあり、各図にスケールを配した。
3. 造物図は、環・塊類3分の1、かめ類4分の1を原則とした。
4. 造構・造物写真の縮尺は統一していない。
5. 実測図、写真図版で使用した略号はSSが下尻高遺跡、SGが管田遺跡、Hが竪穴住居跡、Tが溝状造構、Dが土塙、HBが掘立柱建物跡である。また造物への注記もこの略号を用いた。本文中ではHを号住、Tを号溝、Dを号土塙、HBを号掘立柱建物と表わした。
例：SSH 7-3…下尻高遺跡7号住の3番と命名した造物
6. 竪穴住居跡の規模は下図のように測った。壁高は残存壁高であり、使用時の壁高を示さない。主軸はかまど、炉を有する軸方向とし棟方向を必ずしも表していない。床面積は壁溝の内法から測った。



目 次

序	
例言	
目次	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の地理的・歴史的環境	1
III 下尻高遺跡	4
1 基本土層	4
2 調査の概要　　遺構全体図	4
3 検出遺構と出土遺物	4
(1)縄文時代	4
(2)弥生時代	5
(3)古墳時代	6
(4)奈良・平安時代	17
(5)中世以降	27
(6)その他	30
(7)古墳	31
IV 管田遺跡	32
1 基本土層	32
2 調査の概要　　遺構全体図	32
3 検出遺構と出土遺物	32
(1)弥生時代	32
(2)古墳時代	33
(3)平安時代	33
(4)その他	36
V まとめと考察	38
VI 管田遺跡、下尻高遺跡の火山碎屑物	41
VII 写真図版	P L 1 ~ P L 8

I 調査に至る経過

中之条町大字平地区は昭和63年度、64年度にわたり、土地改良事業が行なわれる。

平地区には、群馬県遺跡台帳に記載される町指定史跡桶塚古墳（台帳No3074）、昭和57年に調査した、名久田8号墳を含む古墳群が事業予定地周辺にあり、今回の土地改良事業地区内も、縄文時代から近世までの遺跡包蔵地として周知されている。

中之条町教育委員会は、群馬県教育委員会の指導を受け、町農林課に土地改良予定地内に埋蔵文化財の存在することを通達した。本遺跡の取り扱いについて教育委員会、町農林課との間に協議が行なわれ、埋蔵文化財を破壊する道路予定地を中心に、記録保存のため、発掘調査を実施することになった。

中之条町教育委員会は発掘調査を行なうにあたり、長谷川福次を臨時職員とし、群馬県教育委員会文化財保護課の指導を受け調査を実施した。

II 遺跡の地理的、歴史的環境

中之条町は群馬県の西部、吾妻郡の北東部に位置し、北は利根郡新治村、新潟県南魚沼郡湯沢町、東は高山村北群馬郡小野上村、南は東村、吾妻町、西は六合村と接する。東部は小野子山にむかって山地がのび、北西部は三国山脈に続く山地で、赤沢山（1454.5m）稲包山（1597.7m）にむけた1300m級の山嶺が続く。西部は木ノ根宿尾根付近から1700m級の山地が連なり、六合村との境の幕坂峠（1060m）にかけて次第に低くなり、南縁の吾嬬山（1181.5m）薬師岳（974.4m）へと中之条盆地をとり囲むかたちで続く。中之条盆地は、吾妻川、山田川、名久田川の合流点付近に発達する山間盆地である。上記河川の流域に数段の河岸段丘が発達し、吾妻川流域の河岸段丘に中之条町、吾妻町の市街地が形成され、他の河岸段丘にも平坦面を中心にして集落や耕地が営まれている。盆地底の標高は330m前後で、中之条町、吾妻町を中心として東村、高山村と小野上村の一部にまたがっている。盆地一帯は洪積世初期に東西約6km南北約6km、水深200mに及ぶ古中之条湖が存在したと推定されていて、その湖沼堆積物が中之条町の基盤層となっている。

下尻高遺跡、管田遺跡とも市街地北東3kmの大字平地内にある。管田遺跡は名久田川東岸の河岸段丘上で標高365m前後の平坦地にある。周辺は蟻川と赤坂川の合流地点で古くから洪水に悩まされたことが、記録に見える。（元文三年洪水御注進状、文政十二年洪水用水田見分願など）管田遺跡の南300m離れたところに下尻高遺跡がある。小野子山に続く名知良久山に接するゆるやかな傾斜地である。標高は370mから380mである。

遺跡地にテフラを供給した主な火山は南西38kmに位置する浅間山と南14kmの榛名山二ッ岳である。

旧石器時代の遺跡は後貝戸遺跡が知られるが詳細は不明である。

縄文時代以降は中之条町東部を中心に概観した。縄文時代は大塚で名久田川北岸に諏訪原遺跡、宿割遺跡、五十嵐遺跡、対岸に寄居原遺跡がある。宿割遺跡は中期の柄鏡形住居の他、前期から後期までの住居址を検出した。今回調査地の北800mに下平遺跡があり、早期の押型文土器と前期から中期の遺構を検出した。また横尾に中期から後期の奥山原遺跡が知られる。名久田川流域での縄文時代の遺構は、ゆるやかな傾斜地が山に接するところにかたよる傾向がある。

弥生時代の遺跡で現在までに確認されているのは比較的少ない。宿割遺跡で中期の条痕文土器を伴う再葬墓と後期の住居址を、五十嵐遺跡で中期条痕文土器片を検出した。他に弥生後期の壺形土器の出土した市街地の伊勢町遺跡と法満寺遺跡が知られる。吾妻町岩櫃山遺跡が南西8kmにあること、近年の発掘で中・後期の土器片が少くない地点で出土していることなどから、当期の遺跡の増加は考えられる。例が少ないため弥生時代の遺跡の立地の特徴は言えない。

古墳時代は、宿割遺跡で前期の住居址が確認され、下平遺跡で後期の住居址が検出された。他に名久田中学校遺跡が知られる。いずれも名久田川河岸段丘上の平坦地か、山麓のゆるやかな傾斜地である。長久保遺跡は吾妻川河岸段丘上段にある集落跡である。その下段の中之条面では中之条高校敷地内に集落跡と見られる法満寺土師遺跡があり、近接する法満寺A遺跡で石組かまどの煙道部が調査されていて古墳時代後期と推定される。

古墳の縮密な調査例は少なく、昭和13年の調査から現在までに消滅しているものもあり、それぞれの築造年代や基模などに不明な点が多い。中之条町では各河川の河岸段丘上に、地理的制約から密集することが多い。中之条12号墳が前方後円墳とされたが、外觀上疑問視されていて、ほとんどが円墳である。中之条町で最も古い古墳は吾妻川と山田川の合流点の段丘上にある石の塔古墳である。竪穴式石室であり、直刀、刀子、鎌、斧、人骨が出土して五世紀代で墳丘が20mから30mの円墳とされ、吾妻町の机古墳と対比される。名久田川南岸の段丘上に平古墳群があり、その中の桶塚古墳は狭長な袖無型石室で6世紀の築造とされる。下平遺跡で調査された名久田9号墳は胴張型石室を持つ7世紀中頃から後期の円墳で、昭和57年調査の名久田8号墳は8世紀初めまで使用された両袖型石室の円墳である。（「上毛古墳綜覧」1938では前方後円墳とされた）平古墳群の密集地から山より離れたところに名久田12号墳があるが、墳丘はなく、詳細は不明である。残された石材から横穴式石室を持つ古墳と推定される。平古墳群は一定の時間幅で継続して営まれたが、その出現から横穴式石室を伴っていたと考えられている。

石の塔古墳の西には小川古墳群があり、吾妻川北岸の市域に市域古墳群がある。

中之条町における古墳の主流は石の塔古墳を除き6世紀以降とされているが、なにぶんにも資料が少なく断定できない。墳丘が消滅していても周溝や周辺に散在する遺物の調査は可能であり、また古墳時代前、中期集落のあることから、それらの墓域調査も今後の課題である。

奈良・平安時代の遺跡で現在までに調査されているのも少ない。吾妻川の対岸に7世紀後半中頃の官営とされる金井磨寺があり、また伊勢町の山稜と接するところに天代瓦窯跡があり8世紀中頃とされる。瓦の一部は金井磨寺に供給されている。

平では平古瓦散布地があり、8世紀前半の平瓦、丸瓦、軒丸瓦が出土している。

大塚の五十嵐遺跡で9世紀から11世紀の焼失住居を含む住居址が検出され、墨書き土器が出土した。また、下平遺跡では羽釜を持つ住居址が検出された。天代瓦窯跡、平古瓦散布地、市代牧等を支えた人々の集落は大規模でなくとも少なくないはずである。今後の調査に期待したい。

中世では応永8年(1401年)以来、天正9年(1581年)まで土地の土豪尻高氏が高山村尻高、中之条町名久田、伊勢町、青山、市城、須川に及ぶ地域を支配した。字名の下尻高はそのなごりである。

参考文献

「中之条町誌」第1巻1976中之条町誌編纂委員会 「中之条町誌」第3巻1978中之条町誌編纂委員会 「群馬県の地名」日本歴史地名大系1987平凡社 「角川日本地名辞典10群馬県」1988角川書店 「金井魔寺遺跡」1979吾妻町教育委員会 「天代瓦窯跡」1982中之条町教育委員会 「大塚遺跡群五十嵐遺跡」1984中之条町教育委員会 「大塚遺跡群五十嵐遺跡第2次」1984中之条町教育委員会 「大塚遺跡群宿別遺跡」1985中之条町教育委員会

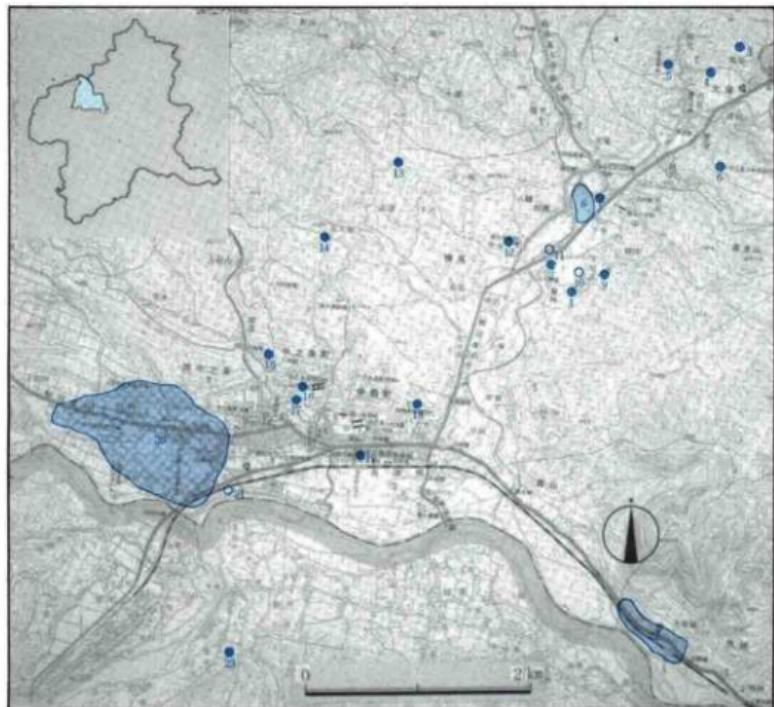


図1 遺跡の立地と周辺の地形

(縮尺 $\frac{1}{50000}$)

- 下尻高遺跡
- 管田遺跡
- 諏訪原遺跡
- 宿割遺跡
- 五十嵐遺跡
- 寄居原遺跡
- 下平遺跡
- 平古墳群
- 平古瓦散布地
- 名久田12号墳
- 橋塚古墳
- 名久田中学校遺跡
- 奥山原遺跡
- 長久保遺跡
- 法満寺遺跡
- 法満寺土師遺跡
- 法満寺A遺跡
- 天代瓦窯跡
- 伊勢町遺跡
- 小川古墳群
- 石の塔古墳
- 市城古墳群
- 金井麻寺

III 下尻高遺跡

1. 基本土層

下尻高遺跡は、南方を名久田川に削られるゆるやかな傾斜地にある。黒色土の堆積は多いが傾斜角の差か、耕作による変動で一様ではない。また火山噴出物も多く含まれるが、純層は奈良期住居跡の窪地に浅間B・軽石が残るのみであった。FAはVIで述べられているようく2次堆積であった。しかし、調査には有効であった。詳しくはVIIを参考されたい。

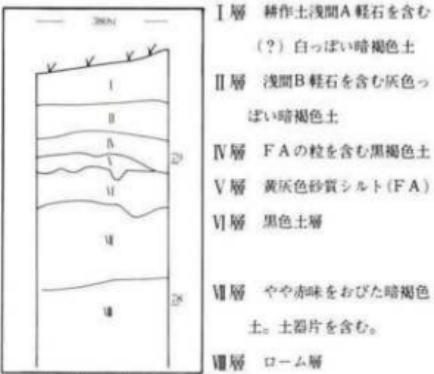


図2 土層図

2. 調査の概要

調査区は、作付の影響による調査順序の関係で畠境を基準にして南より、A区、B区、C区の3区に分けた。遺構はB区に集中している。確認面はIV層上面を基準とし、IV、V層の流出で無いところは、VI層上面とした。B区はV層の残りが悪くVI層上面が確認面である。

検出遺構は弥生時代後期住居跡2棟、古墳時代前期住居跡2棟、古墳時代後期住居跡2棟、奈良・平安時代住居跡7棟、不明2棟、掘立柱建物跡12棟、土括、溝状遺構等である。道路部分の調査を基本としたため、住居跡を完全に調査できたのは2棟のみで、他は部分的な調査に止めた。調査区の幅が狭いところから、掘立柱建物跡は規模が大きいためと、重複が多いことから、全容をつかむのが困難であった。(図3 遺構全体図参照)

3. 検出遺構と出土遺物

1) 繩文時代

繩文時代の遺構の検出はない。数量は少ないが、他の時代の遺構覆土中と浅間B・軽石層下の堆

图3 下层高速公路全线图



積土中から土器片を採取した。前期・中期・後期に及び、当初踏査の知見で縄文時代後期以降とされたとの異なり、前期まで逆のぼり、土器片中の比重ではやや前期が多い。今回調査地がわずかにくぼむ谷部にあること、密集地は西側にあることから、今後、縄文時代の遺構の出現も充分予想される。出土した土器、石器は下図の通りである。

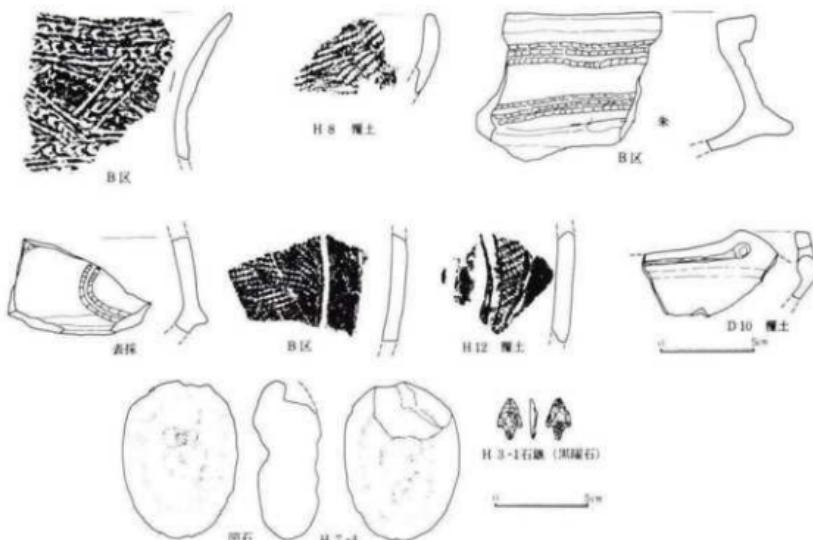


図4 縄文時代の遺物

2) 弥生時代

住居跡2棟を調査区のB区で検出した。現地表では、傾斜が最もゆるやかになる地点で、浅間B軽石を含む土層が厚く堆積しているが、浅間B軽石の純層もF A層も無い。確認面はB軽石層の混じる土層を除いたVI層上面である。

10号住

後の7号住居に大部分壊され、壁は東壁のみ残っていた。7号住居の貼床中と覆土に、樽式土器の破片がかなり混じっていたことから、ほとんどの部分で床面近くまで掘削されたことがうかがえる。調査は住居の半分である。残存状態から推定した平面形は東西に長い隅丸長方形で、短軸は、3.3m、長軸は不明である。柱穴は確認されず、推定壁高は、縄文時代の堆積土と考えられる。赤味がかった暗褐色土の上面までとして、75cm以上である。主軸は北から94° 東へ傾く。床面はローム層で、調査範囲では、ビット、土塙等は無い。調査区ぎりぎりのところに、炉跡があ

り、南に石組が残っている。炉床はわずかに焼土化していた。炉跡の周辺に土器片が集中していて、一個体になった。(H 10-1) 東壁際の土器片は別個体であった。(H 10-2) いずれも變形土器でH 10-1は胴部下位より下を欠き、H 10-2は頭部から上が部分的に残る。H 10-1は折り返し口縁で、そこから胴部上位に波状文を描き、頭部に三單位止巻状文を施す。胴部上位より下は無文でヘラみがきである。口縁部がわずかに外返し、頭部は長く、上位がふくらむ胴部に続く。H 10-2は折り返し部に波状文を施さない。施文形態、形状から樽式土器B類(弥生式後期)である。

(図5)

14号住

7号住から傾斜地を登り南へ10mのところにある。調査区の西側に接していて、調査は全体の^{1/3}である。後の柱列群により覆土が掘りおこされ、柱穴の先端は床を掘削している。そのため、当住居跡の覆土には、弥生時代から平安時代までの遺物が混じっている。覆土は上層が黒褐色土で、下層は赤味がかった暗褐色土である。後世の柱跡には、浅間B軽石やFAが混じっているため、土の色調は似ていても明瞭に判別できる。

平面形は隅丸長方形で、長軸6.7m、短軸4.7mであり、床面積は27.7m²あり、当期の住居跡の中では比較的大きい部類に入る。主軸は北から12°東に傾く。柱穴は3本検出し、調査区外のを含めて4本と推定できる。深さは40cmを測り、対角線上で、やや内側に位置する。東西柱穴間隔は1.7mで南北は2.7mである。壁溝は、細く深くほぼ全周するが、東壁中央部で一部止切れる。原因は出入施設によるものか。壁高は60cm(残存)で、ローム層まで掘り込んで床とする。床は貼床である。南東コーナーに1.7m×1.25mの長方形で高さ10cmのベッド状造構が付設される。

北側の東西の柱穴を結ぶ線上の中央から北に寄ったところに炉跡が検出された。炉床の焼土はわずかで細長い角のとれた礫が一つ残っている。

床面に完形土器はなく、覆土中から樽式土器の出土も量は多くない。高杯脚部(H 14-1)は北壁西寄りで床から浮いた状態で出土した。脚部は八字状であるがやや外反する。

住居形態と出土遺物から弥生時代後期の住居跡とした。住居の平面形は一般的であるが、ベッド状造構が付設される例は、稀といえる。(図14)

(1)「弥生式土器Ⅱ」 ニューサイエンス社

(2)「新保遺跡Ⅱ」 1988 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

3) 古墳時代

住居跡は前期2棟、後期2棟であり、土塙が三基検出された。いずれも浅間B軽石を含む土を除去し確認面としたが、FA層は無かった。

前期

8号住

B区中央で検出された。調査区東側に接していて調査は全体の^{1/3}である。14号住と同じく、後

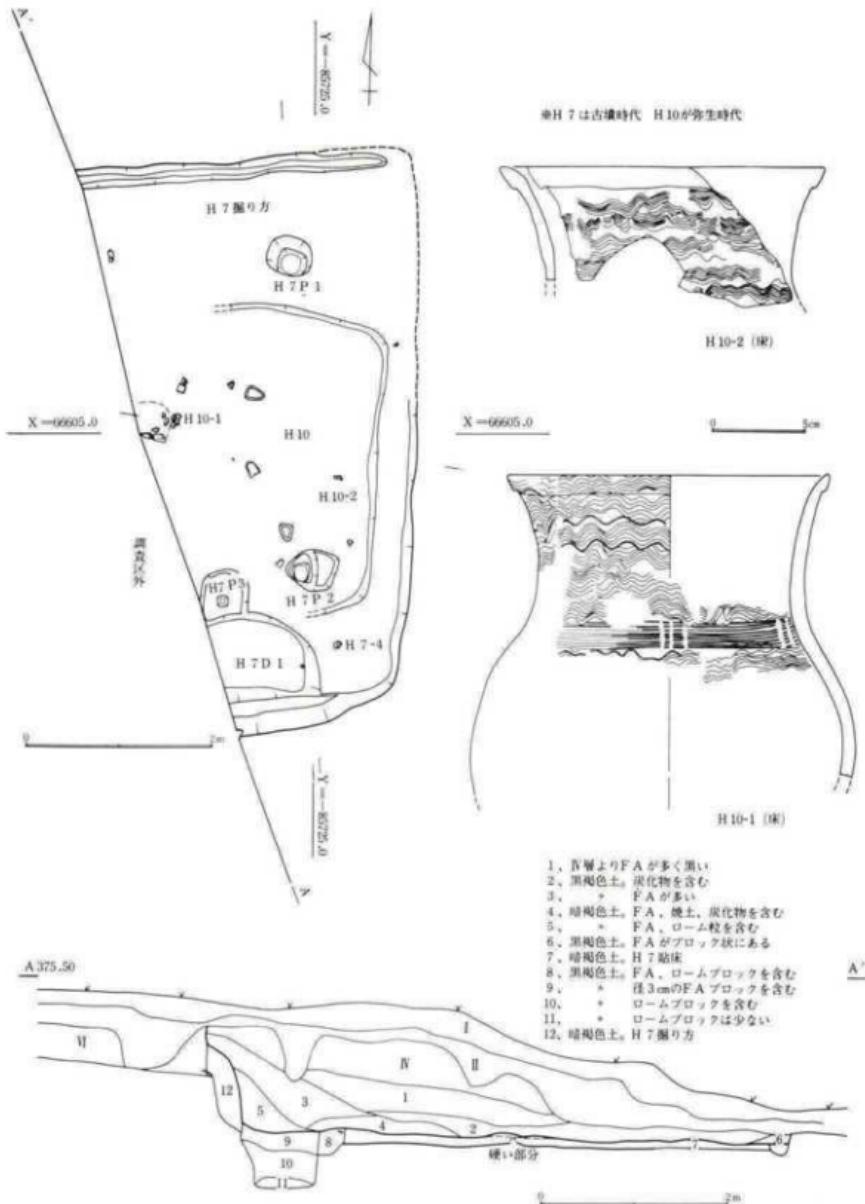


図5 H10、H7掘り方 遺構図

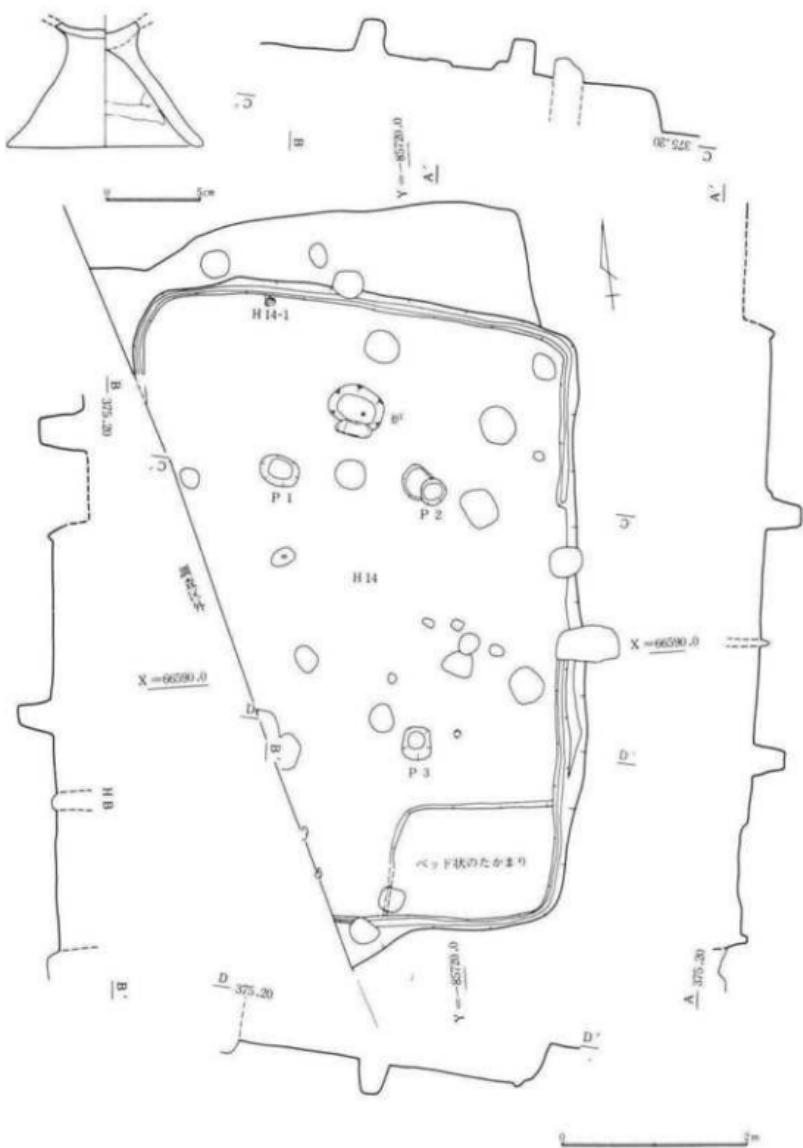


図6 H14造構図

世の柱列群に掘削される。平面形は当期の例からすると方形と思われるが未定である。基模も不明である。残存壁高は70cmで、柱穴は一本検出し深さは55cmである。主軸は南北方向を想定する（柱跡の検出が無いので）北から9°東に傾く。西壁に浅い壁溝がつく。覆土は上層が黒褐色土で下層が暗褐色土でFAは含まない。壁下の三角堆積は認められず、急激な埋没、つまり人為的な廃棄が考えられる。後世の柱跡には浅間B軽石、FAが混じり判然としている。ローム層上面ぎりぎりのところで掘るのを止め床としているために、壁はほとんど黒褐色土である。床はロームと黒色土の混土で、中央部が最も硬い。

南東コーナーで炭化材が床面から10cmから40cm浮いた状態で検出された。炭化材に押しつぶされたかのように下からS字口縁台付甕が床に密着して出土した。H14-4は後世の柱跡によって、口縁部が無くなっている。他に小型壺が1個（H14-1）砥石が1個（H14-2）出土した。炭化材とS字口縁台付甕が密着していることから、焼失住居であり、火災のために廃棄されたか、火をつけて廃棄したかの2通りの可能性がある。いずれにしても、急激な廃棄であり、それは覆土断面の観察結果と一致する。

時期は遺物から古墳時代前期（4世紀後半）である。（図7）

9号住

8号住の南西に接している。調査区の西側に接していて、北東コーナーのみの部分的な調査である。近代の掘削（T6）によって一部壊されている。壁溝、柱穴は調査したわずかな範囲では無い。主軸を南北方向に想定すれば、北から15°東に傾く。確認した壁高は13cmであり、ローム層まで掘り込んでいない。貼床は無く、均一でやや赤みを帯びた暗褐色土が、床と壁である。床に密着して、つぶれた状態のS字口縁台付甕が一個体分出土している。遺物から、8号住とそれ程、時間的な隔たりのない、古墳時代前期の住居跡である。（図13）

中期

中期の遺構は無い。遺物を詳しく点検したが、土器片さえ無かった。

中期はさらに下段に下るようだ。

後期

2号住

調査区の最も南に位置し、山地に近く、調査区全体で最も勾配のきつい傾斜地にある。

確認面は、浅間B軽石の混じる土を除いた黒褐色土で、ごくわずかにFAが残る。現在の畠境の下で表土は厚い。

平面形は隅丸方形で、長軸、短軸の区別はできず5.4mを測る。壁溝内法で4.75m×4.6mで床面積は21.85m²である。主軸は北から135°東へ傾く。どの壁方向も徑緯線から45°ずれるため東西南北では混乱するので、図8のようにかまどの付設する壁をAとし、時計回りで壁B、C、Dと呼ぶことにする。この45°のずれは、コンタライインの示すように地形的な制約と思われる。つまり、傾斜面にそって、住居を造ったためにこのずれが生じたと考える。

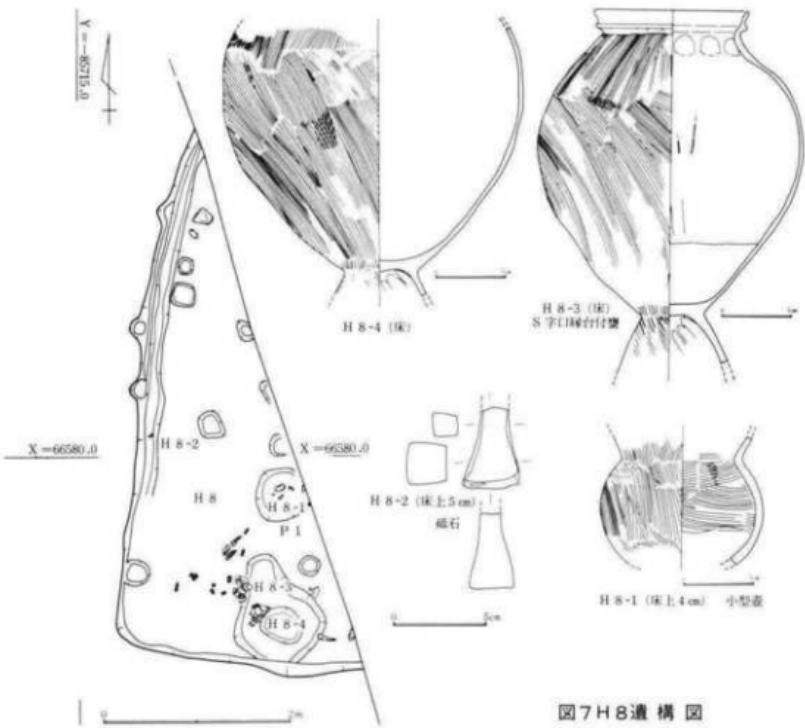


図7 H8遺構図

壁溝はかまど部分を除いて全周し、幅は10cmと狭く、深さは10cmから18cmと深い。

確認壁高は95cmと深く、ローム層をかなり多く掘っている。黄色のサラサラとして、もろい軽石層（Y PまたはS P）まで掘り込んでしまったために、床はほとんどがロームを主として、黒色土を混ぜた貼床である。壁は、ローム層では、直立に立ち上がり、黒褐色土層に至って、外側に開く。ローム層から黒褐色土層の変移点近くで、水平方向にうがつ小ピットがある。床面に垂直方向の小ピットがあり対応している。細い棒を組んで、棚を造ったと考えている。

柱穴は4本検出し、柱痕の径は15cmで深さは60cmである。対角線上に位置し、柱穴間隔はいずれも2.4mである。柱穴掘り方は隅丸方形に近い。これは、柱が方形というよりも、掘削工具の刃が直線であるためからではないかと考える。

覆土はFAを多く含んでいる。

覆土からは、片面に煤の付着した亜円礫や偏平な角礫、刀子、模倣壺や甕の土器片が出土して

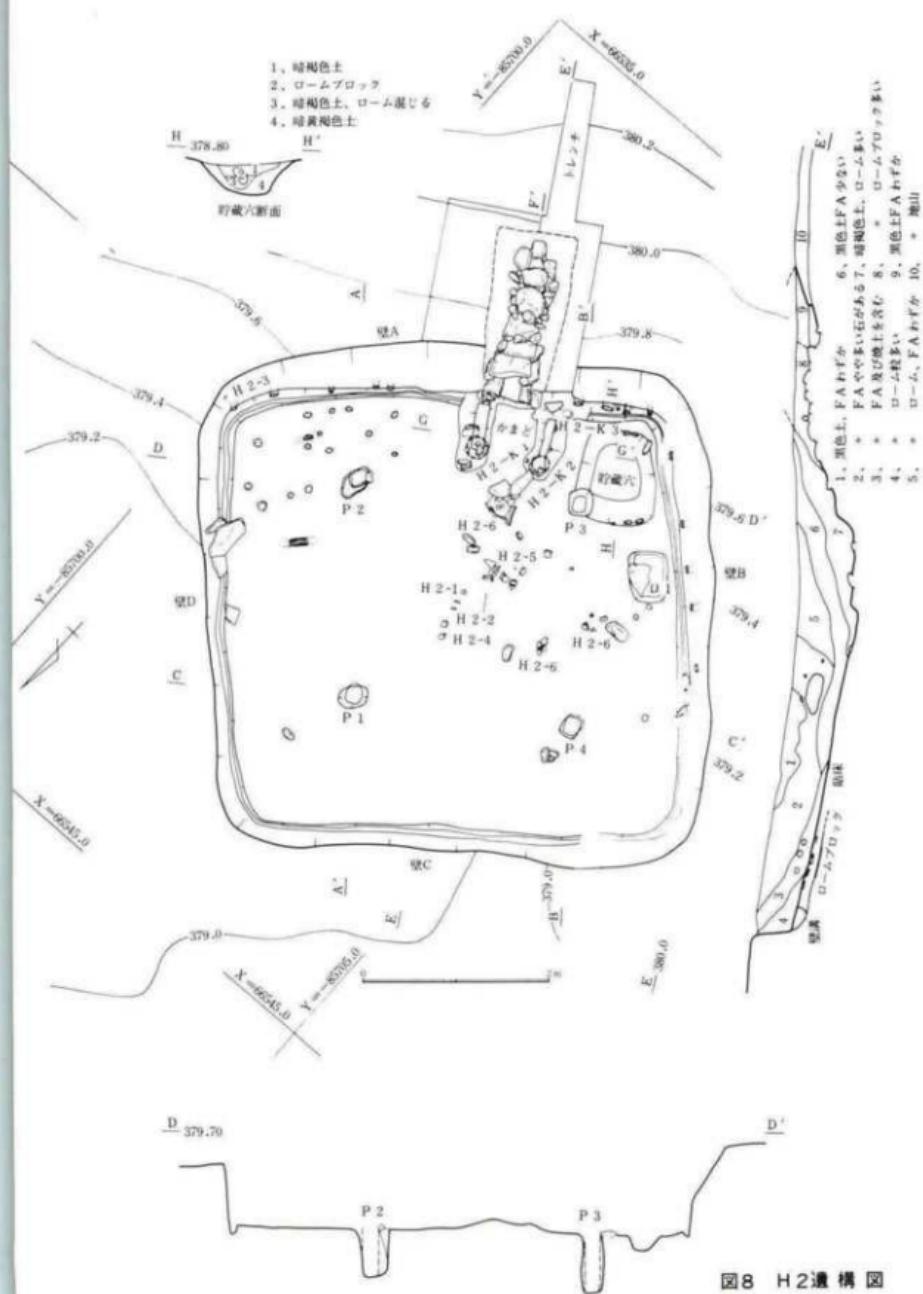


図8 H2遺構図

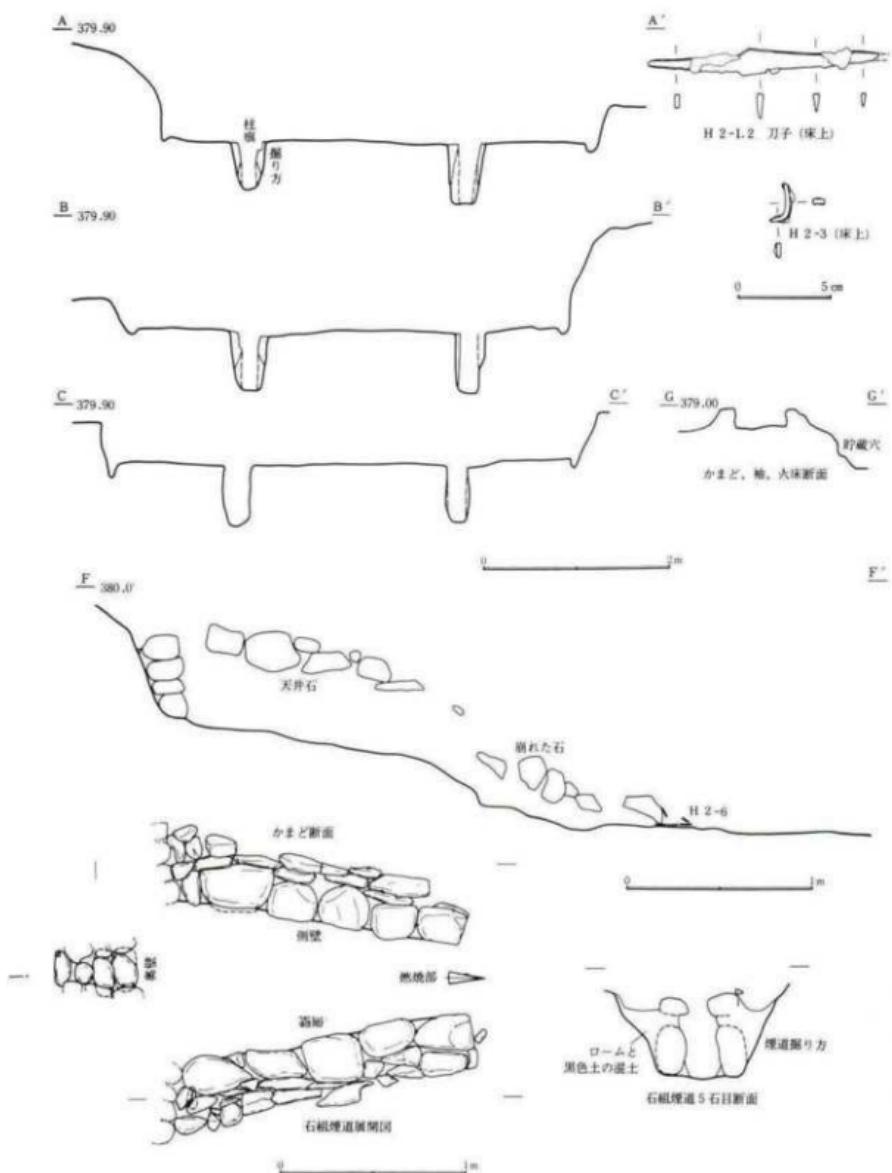
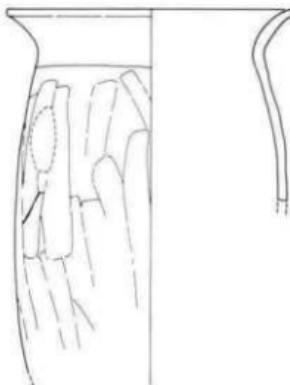


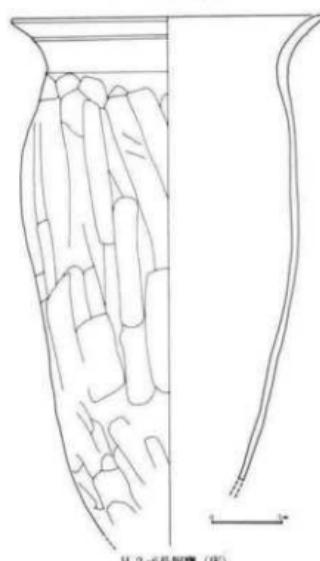
図9 H 2断面図 かまと展開図等



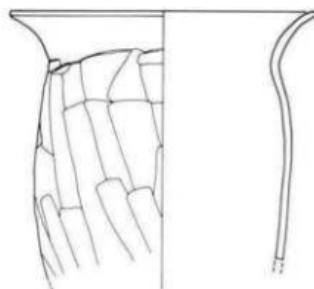
H 2-K 1 長柄甌（地）



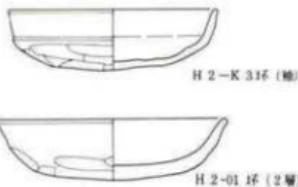
H 2-K 2 長柄甌（釉）



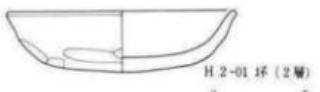
H 2-6 長柄甌（床）



H 2-4、5 長柄甌（床）



H 2-K 336（地）



H 2-01 床（2号）

0 5cm

図10 H 2出土土器

いる。

注目されるのは壁Dの上部にもたれかかるように大きく偏平な角礫が検出され、下面に煤が付着していたことである。この石はかまどに使用されたと考えられ、かまど廢棄時に一組はずされ、住居がある程度埋った段階で再度、南東に置かれた。覆土中にF Aがブロック状で存在すること

と合わせて、かまどと住居の人為的な麻糸（人力による破壊、埋め戻し）が想定される。

遺物は前述した刀子（H2-1.2）とかまど前に長胴甕（H2-4.5）（H2-6）が破片として散布している。また「こもあみ石」が床面にまとまってある。かまど袖には、芯材として、長胴甕が倒立して埋設されており（H2-K1、H2-K2）、袖に密着して模倣环がある。

壁D寄りに、垂木の一部とみられる炭化材が出土している。丸材で径は8cmであった。

かまどは、壁Aの壁B寄りのところに付設される。かまどの中軸は壁に直交せず、やや西に傾く。燃焼部の上部は崩れていて、粘土、長胴甕、石が、押しつぶされたかのように、火床に着いている。袖は前述したように焚口部付近で、長胴甕を双方に倒立させ芯材とし、燃焼部ではロームを削り出し芯材とし、それぞれ、粘土を貼っている。崩れた石の位置と量、形態（片面に煤が付くこと）から推測すると、それらの袖の上に、さらに石と粘土を用いて、かまどの上部を造ったと思われる。H2-6 長胴甕は、両袖の甕の上に鳥居状にかけられたブリッジの可能性がある。火床はわずかに焼けている程度で、両袖もあり、焼けていない。焼土化した土の崩落、剥離も考えられるが、焼土の出土量は多くない。火床の全体の傾斜角は壁にむかって10°で中央部がくぼむ。

燃焼部と煙道との接点は、壁のラインと同一であり20cmの段差がある。煙道底面も10°の傾斜で長さは1.8mである。

煙道は側壁、奥壁、上部とも自然礫で組まれ、底部は地山のローム面である。石組みは、側壁、奥壁が完全に残り、天井石は、80%残っていた。側壁は根石に小兒頭より大きい亜円礫を5石並べ、その上により小さな礫を2段積む、3段積みが基本である。2段目、3段目の石は偏平な角礫を据え、石と石とのすき間は、小石や、黒色土とロームの混土で充てんする。上になるにしたがってやや内側にせり出す。持ち送り構造（古墳の石室構築技法）が見られる。その上に両側壁にかかるように大きな亜円礫と偏平な角礫を5石（使用時には6石、1石抜かれている）置き天井石とし、小さめの石をつめる。天井石の上にロームと黒色土の混り土をのせ、煙道を完成させている。奥壁は四段積みで、煙出し孔は一辺15cmの方形を呈している。

石組み煙道の規模は幅50cm、長さ1.8m、高さ50cmである。煙道の内法は、燃焼部との接点で幅20cm、高さ35cm、煙出し部では幅17cm、高さ42cmと、奥に行くにしたがってやすぼまる直方体である。

住居跡の時期は遺物から7世紀後半と考えられる。

7号住

B区の最も北寄りに位置し、調査区の西に接している。2号住とは、60m離れている。調査は全体の1/4で、5.8m四方の隅丸方形と考えられる。床面積は30.3m²（推定）である。柱穴は2本確認し、掘り方は一辺30cmの隅丸方形で、深さは55cmである。主軸は不明で、2本の柱穴ラインは北から4°西へ傾く。

北壁に浅い壁溝がある。

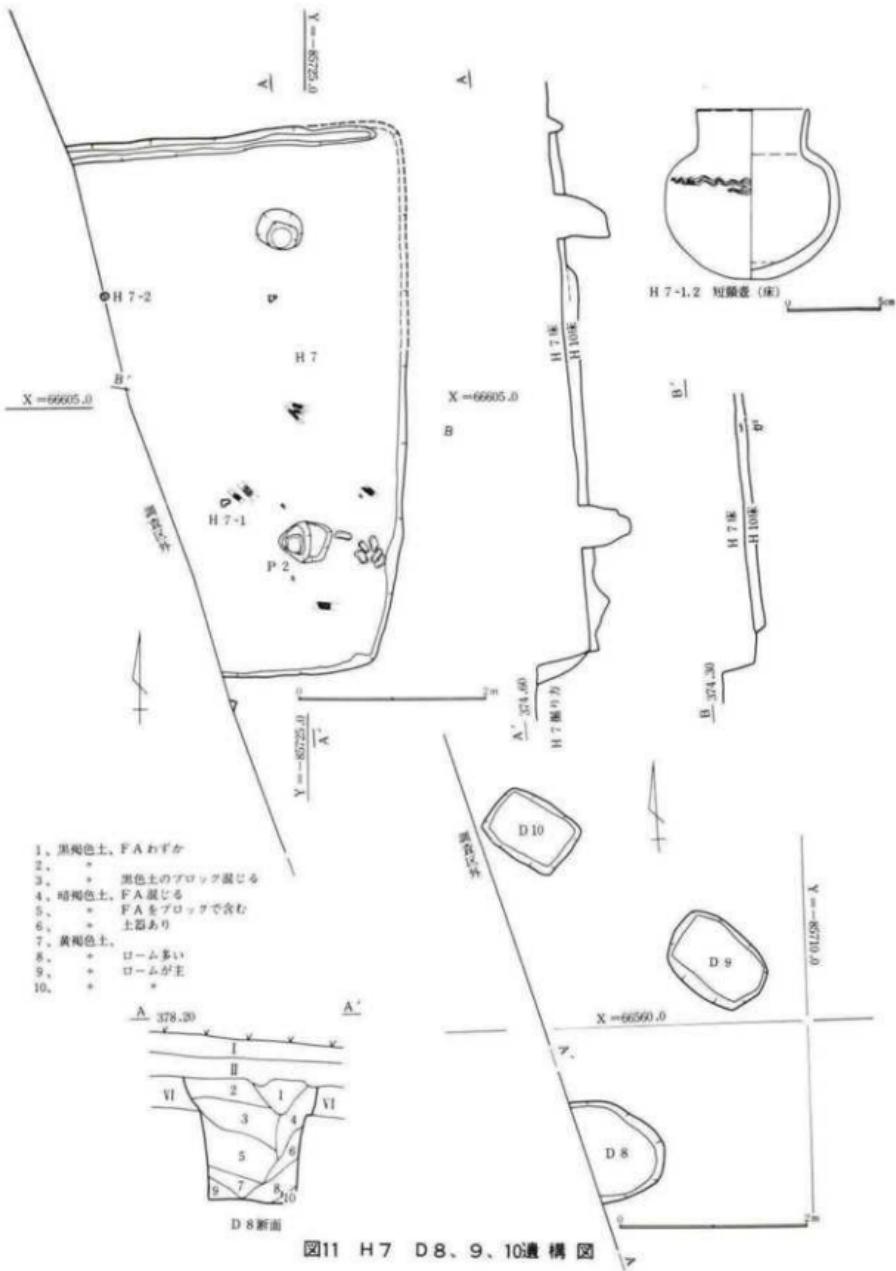


図11 H7 D8、9、10遺構図

覆土に細かいFAを多く含み、床及び貼床下にFAがブロック状にある。残存壁高は110cmと深い。ローム層まで深く掘り、床はロームを主体とする貼床である。中央部と壁際がよくしまり硬い。

貼床下に土塙(D-1・図5)、埋土にFAをブロック状に含んでいる。

南壁の掘り方は大きく、後に粘性のある黒色土を貼って壁のラインを整えている。

床面近くから垂木と思われる炭化材が出土し、焼失住居の可能性をうかがわせる。

遺物は、割れて散在し、床に着いている短頭壺(H7-1)と須恵器片で、他に覆土中から、須恵器片、土師器片、また弥生期の10号住を掘削していることから、櫛式土器片が出土している。東壁に「こもあみ石」6個を検出している。(図11)

凹石(H7-4、図4、図5)は貼床下からの出土である。

土塙

B区南側で三基、近接して検出した。形状や覆土も類似している。

8号土塙

土塙の性格を示す遺物は出土しない。覆土中の遺物は、縄文時代から古墳時代後期までの土器片をわずかに含む。周辺のFA層は全く残っていないが、覆土中にFAを多量に含むことから、FA降下後、地表にFAが残留している時期に掘られたものである。どれ程の時間でFAが流出し、無くなるのかは地形により異なり不確定要素が多いが、奈良、平安期の造構覆土の割り合いで、これらの土塙より少ないこと、また遺物が、古墳時代後期を下限として、奈良期以降のものが無いことから、時期はFA降下後の古墳後期と考えられる。

8号土塙は、調査区西に接するため、全体の土を発掘し、断面観察を行なった。平面形は楕円形で、長軸は推定で1.5mあり、短軸は1.05mである。深さは1.25mと深く底面は平底で、ほぼ水平である。ロームを深く掘り込んで、壁はほぼ垂直に立ち上がるが上位で外側に聞く。

土層はきれいに互相を成していて、人為的で、短期間の廃棄が考えられる。傾斜地を上ったところに古墳時代後期の2号住があるが、関連はつかめない。

9号土塙

8号土塙の東に位置する。平面形は隅丸長方形に近い楕円形である。底面は隅丸長方形である。長軸1.13m、短軸0.88mである。深さは90cmで推定110cmと考えられる。壁は直立し、上位でやや外側に聞く。

底面はほぼ平坦、両脇に小ピット様の窪みがある。覆土は8号土塙と同様で、人為的な廃棄が考えられる。

遺物は覆土中から、縄文時代中期と古墳時代後期の土器片が出土している。

10号土塙

8号土塙の北に位置する。三つの土塙中、最も整った平面形をしていて、隅丸長方形である。長軸0.95m、短軸0.70mで深さは0.7m推定で1mである。壁はしっかり掘られて、直立する。

底面は平底であり、9号土壙同様、ピット様の窪みがある。他と同じく人為的な廃棄である。遺物は覆土中から、縄文時代前期と古墳時代前期の土器片が出土している。(図11)

4) 奈良・平安時代

4号、5号住

A区と第2トレンチの接点で検出した。確認面は、浅間B軽石下の黒色土である。住居跡覆土の上面に浅間B軽石層の純層があり、周辺ではブロック状になったFAが面的に残っている。

4号住と5号住は重複していて、4号住が新らしい。5号住はかまどと壁がわずかに残る程度である。

4号住は長軸4m、短軸3.65mの隅丸長方形で壁高は65cmである。推定壁高は浅間B軽石純層より下と考えれば、85cmを超えない。

覆土にはFAが粒子状になって少し混じっている。

この地点は黒色土の堆積が厚く、床はロームまで掘り込んでいない。床は貼床で、黒色土を主として、床面には焼土がちらばり、やや硬い程度である。

中央を中心に、垂木とみられる炭化材とブロック状の焼土を確認でき、焼失住居跡である。炭化材は床面から10cm~20cm上にあり、全て丸材であった。

かまどは石組かまどで、燃焼部の脇の石は残っているが、ほとんどが崩れている。底部のない長胴甕が焚口に落ちている。かまど構築材の石が、前の床に密着していることから、人為的な廃棄を考えられる。

かまどの廃棄と焼失との前後関係は、かまど崩落土の下に炭化材が認められないことから、かまど廃棄が古い。焼失はその後である。

遺物は床土10cmに須恵器ふたがあり、帶金具は、炭化材が集中する地点から、炭化材と同じレベルで出土している。

時期は遺物から8世紀後半代とされる。

5号住はかまどと一部の壁のみで全容は不明である。かまどは石組かまどだが、ほとんどが崩れていて原位置をとどめない。遺物も土師器がわずかに出土した程度である。(図12)

6号住

B区に位置し、調査区東に接する。調査は全体のおよそ半分である。

南北軸は5.6mあり方形の平面形を呈すると思われる。調査範囲でかまどの検出がないため主

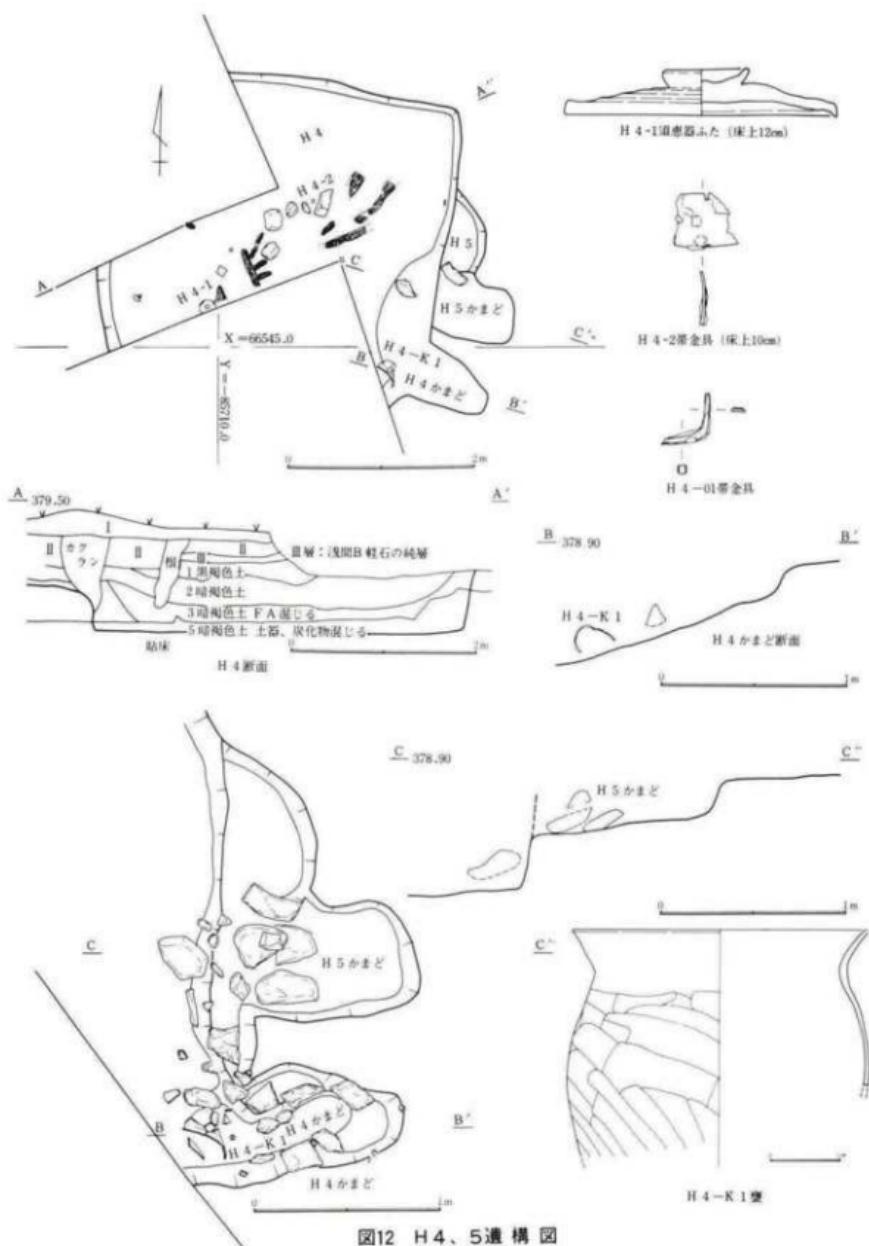


図12 H4、5遺構図

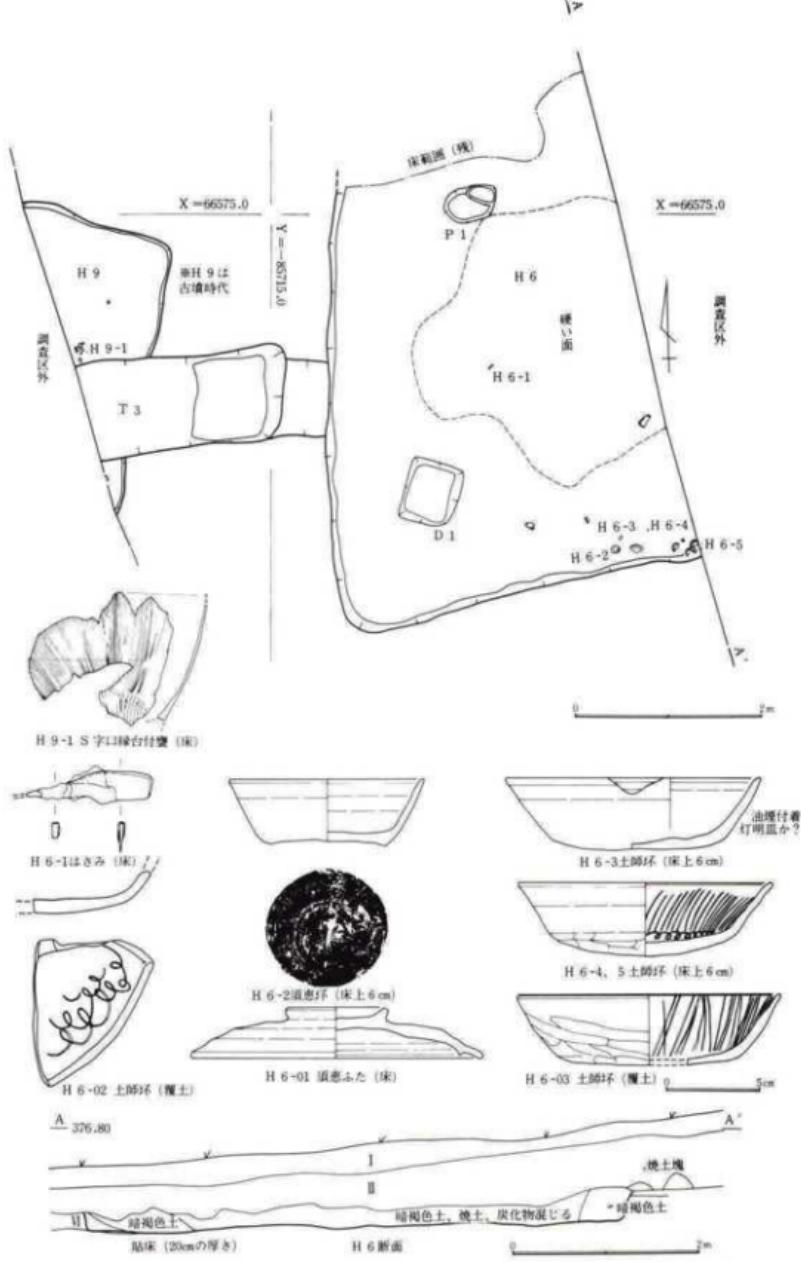


図13 H 6, 9遺構図

軸は不明だが、南北軸は北から 2° 東へ傾く。柱穴、周溝はない。

現在の畠境にあるため床面から30cm上は拔根による擾乱を受け北壁の確認は困難であった。

残存壁高は30cmである。掘り方はローム層まで及び、床は厚さ20cm前後の貼り床で、黒色土にロームをませ、たたきしめている。中央の広い範囲が三和土のように硬く、貝殻状に薄くはがれるほど、たたきしめていることがわかる。

南壁に焼土がかたまりであり、かまどの崩壊土である。

遺物は、床面密着で鉄製はさみの片方(H6-1)と土器片が出土した。南壁によりかかるように完形の坏類が少しき割れた状態で床から5~6cmのところで検出された。

床面密着で円板状のつまみを持つ須恵器のふたが出土している。(H6-01) H6-3は口縁のV字状の割れ口を磨耗して利用している。体部内側上半部に油煙がついていて、灯明皿と思われる。H6-2は須恵器環で、底部外周縁が磨耗している。H6-4.5は土師器環で、内側底部にラセン状、体部に放射状の暗文を施している。他にも床面や覆土から暗文を施す土師器環の破片が出土している。

住居内のP1、D1は浅間B軽石を覆土に含む後世のものである。

出土遺物から、8世紀前半とされる。(図13)

11号住、12号住

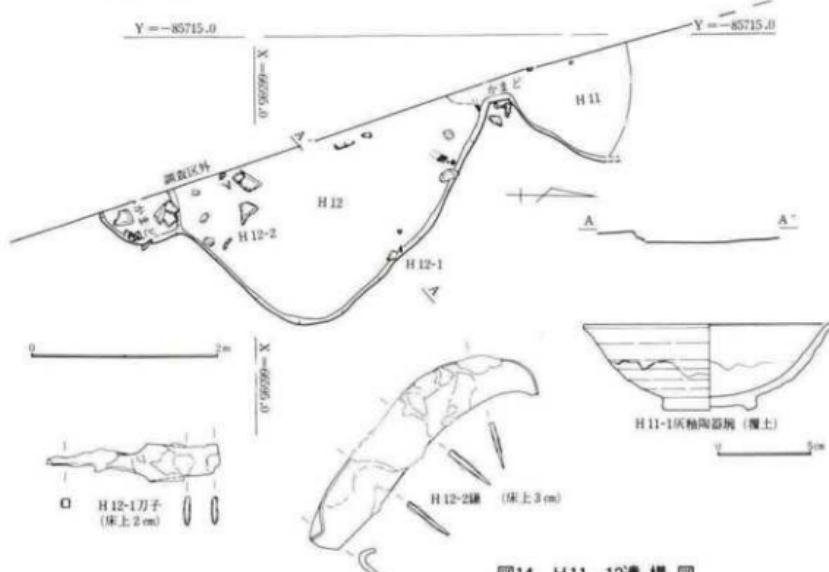


図14 H11、12遺構図

B区北よりに2軒重複し、調査区の西側に接して検出した。いずれも全体の $\frac{1}{2}$ 以下で残存状態も良くない。11号住が新らしく、かまどが12号住の壁を切って付設されている。ほとんど攪拌で壊され、かまどと壁の一部のみの検出である。残存壁高は13cmで床は黒褐色土の貼り床であり、ロームまで掘り込まない。かまどは石組だがほとんど崩落している。

床面から、土師器片、覆土から、土師器、須恵器の破片と灰釉陶器の塊が出土している。

12号住も全容がつかみにくい。残存壁高は13cmでローム層まで、掘り込まない。床は黒褐色土を主とする貼床であり、厚さは20cmである。

壁際で炭化材を検出した。

鉄鎌（H 12-2）と刀子（H 12-1）が床から浮いて出土している。床面と覆土から土師器と須恵器の破片が出土した。

かまどは石組だが、崩落している。（図14）

1号住

第2トレンチの調査の際に、焼土化した床面の一部を確認した。その後トレンチを拡張して全体を調査した。

平面形はゆがんだ隅丸方形で、長軸は4.5m、短軸は4.3mである。床面積は16.4m²であり、壁高は30cmを測る。

壁溝はかまどを除いて全周し、幅15cmから20cmで深さは床面から5cmである。

柱穴、貯蔵穴は無く、北壁に浅い土塙一基を有する。

主軸は北から110° 東に傾く。かまどは東壁の南 $\frac{1}{2}$ のところに付設される。

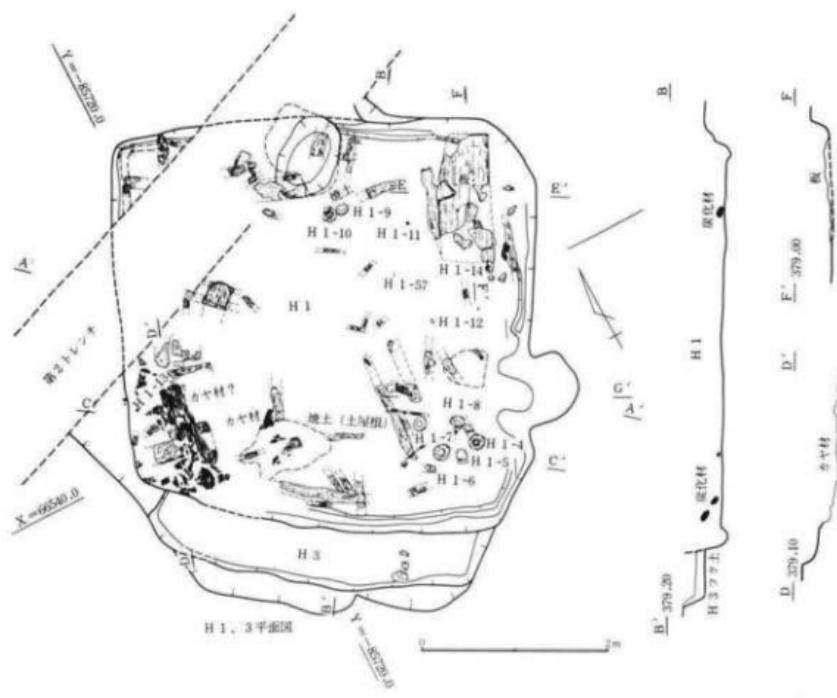
確認面はF Aをブロック状に含む黒色土であり、住居跡はF A層を切って造られている。覆土は黒褐色土が主でF Aがわずかに混じり、焼土層が厚い。

床はロームまで掘り込まずに、黒色土に粘土をませた貼床で全体がわずかに硬い程度である。

かまどは石組かまどである。燃焼部内法は75cm×36cmで袖が壁の内側に40cm張り出している。支脚石は南側へ傾き、側壁の石は残っているが内側にややゆがんでいる。上からの圧力を受けていること、石材が床から出土することと合わせて人為的な廃棄が考えられる。火床はよく焼けている。

遺物はかまど焚口の前面から南に集中していて、いずれも床面から1cm～7cm上で出土し、遺物の下に焼土と炭化材をはさんでいる。床面密着は灰釉小型長頭壺（H 1-24、H 1-58）と鉄器（H 1-25）のみである。かまど前の遺物出土状態は後述する、空沢遺跡H H 34（渋川市）と共通性を有する。棚の存在か、または屋根上に土器を置くこと、焼失後の埋納等が考えられる。

焼土や炭化材の上から、多くの土器が出土している。土師器はコ字形頭部を有する壺が主体で須恵器、土師質土器は壺、瓶類、大壁の壺、壺類の破片が出土している。接合する破片も多いが、ほとんど完形にならない。また、鉄くぎ、砥石の破片が出土している。



A' 1. 黒褐色土、硬い
 2. * 土器を多量に含む
 3. 1. 硫土を多く含む層
 6. 7. 硫土を含まない

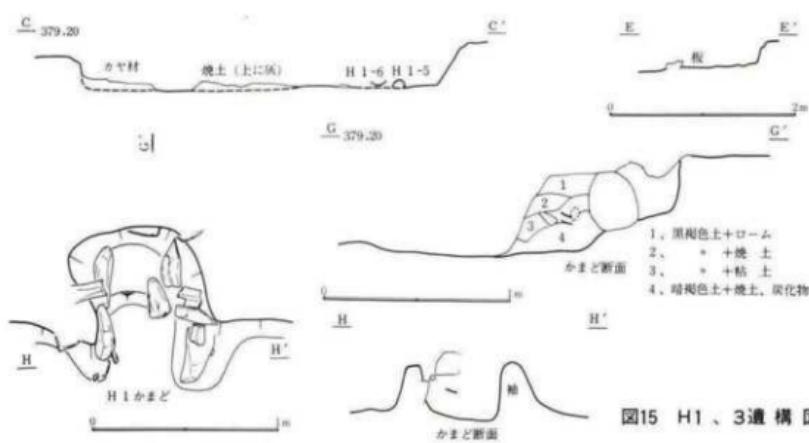


図15 H1、3遺構図

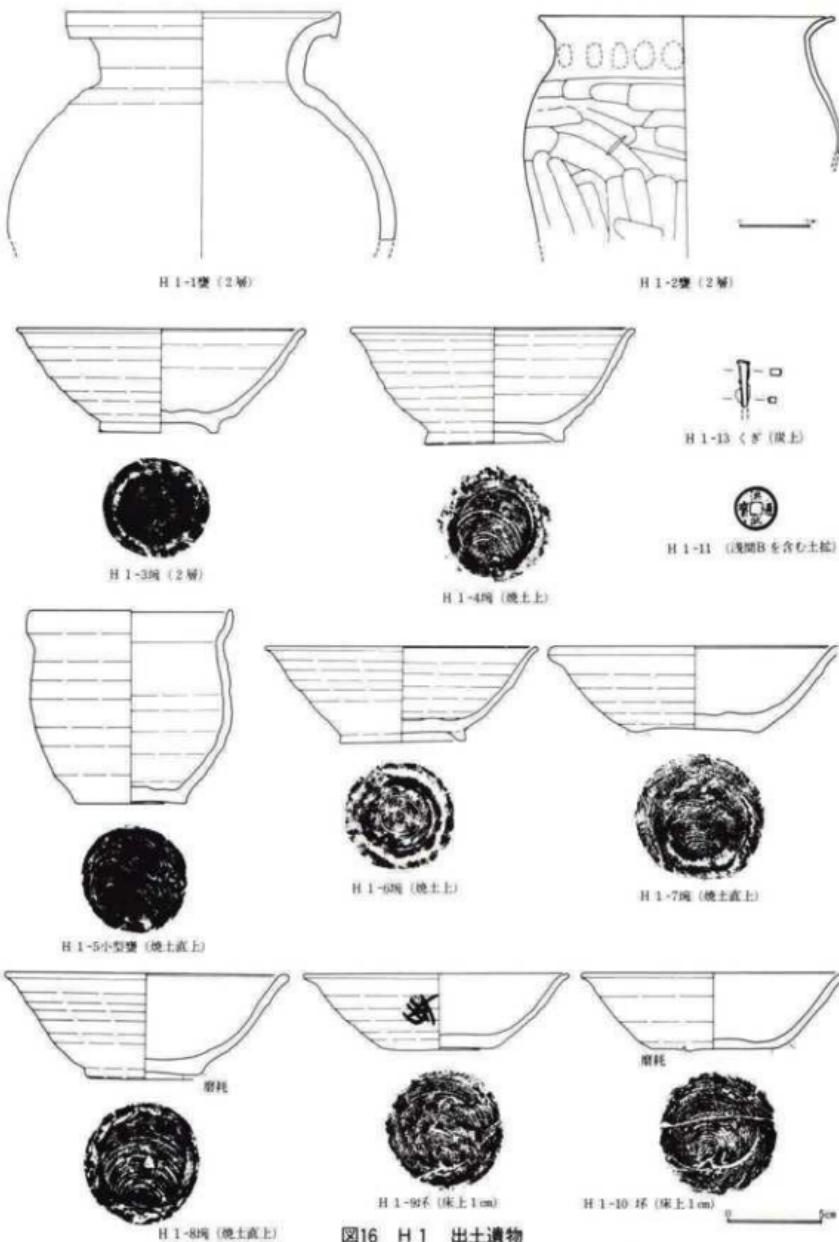
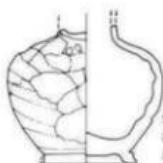


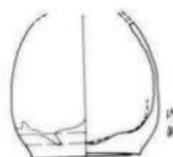
図16 H 1 出土遺物



H 1-14 盆(板材上)



外
面
熟
土
今
计
刻
度



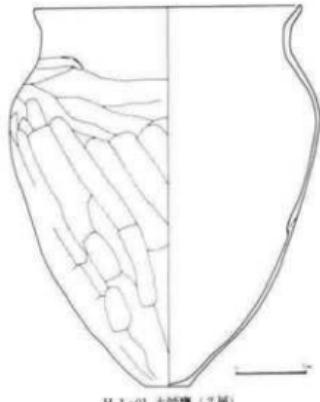
内
面
刻
度



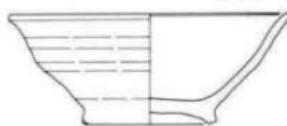
H 1-24 瓷釉瓶(底)



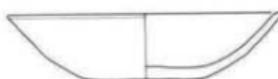
H 1-58 瓷釉瓶(底)



H 1-01 土质甕(2层)



H 1-02 甕(烧土上)



H 1-04 盆(烧土上)



0 5cm

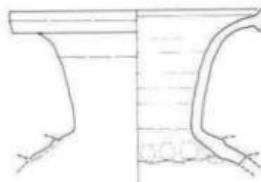


匱

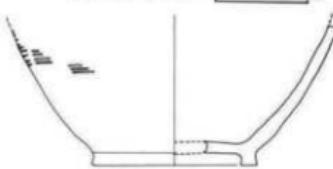


H 1-03 甕(烧土上)

0 5cm



H 1-05 甕(把手付, 烧土上)



H 1-06 甕(烧土上)



H 1-07 甕(2层)

图17 H 1 出土遗物

墨書き器が三点出土している。器形は皿、环、壺であり、出土地点もばらばらである。H1-4は高台付皿で体部は著しく外返し、赤黄色を呈している。墨書きは薄く、「大」「川」が判読できる。他に「城」か「誠」か、判別できない文字がある。H1-9は环で、体部はやや丸味を帯び、くすんだ褐色を呈する。墨書きはくっきりしているが判読できない。かまど焚口前方から南側にかけて分散した状態で壺が出土した。(H1-03) 明るい褐色を呈するが、2次的に熱を受け、くすんでいる。墨書きはややはっきりとしていて「圓」と判読できるが意味不明である。

他に「洪武通宝」が出土しているが、浅間B軽石を覆土に含む土塙が住居跡を切り、そこからの出土であるため、住居跡とは直接の関連はない。

この住居跡の最大の特徴は、焼失住居跡で建物の部材が炭化して良く残っていること、土屋根の痕跡を残すことである。

部材には丸材(皮つきと、皮をむいたものの2種)、丸材を半截した半丸材、板材、カヤ、繩等とバリエーションに富んでいる。部材は中央は少なく、壁際が多く、良好に残っている。

垂木には、丸材で径6cm~8cm、半丸材で径10cm~13cmのものを使用し、間隔は30cmが平均で、10cmの狭いところもある。半丸材を使う場合は平坦面を上にしている。その上に板材、半丸材の横木をのせる。部分的に径4cm前後の丸材も使用している。

カヤ材は南東コーナーで良好に残存している。2層構造が確認でき、上層は屋根の傾斜にそっており、下層はそれに直交する。上層はカヤを面的に平坦に並べ、下層も基本的には同様であるが、部分的には、たばねたカヤをU字形に折り曲げて組み合わせている。下層のカヤ材に直交して繩が検出されている。全体は不明だが5本~6本横に並べ、下層のカヤ材と横木を結び合せているものと見られる。

中央南壁寄りのところで、焼土とカヤ材がサンドウィッチ構造になっているのが確認された。下材のカヤは屋根傾斜方向と平行で、その上にシルト質の焼土が15cmの厚さであり、さらに白色の灰になったカヤ(?)が下材のカヤと直交した状態である。

中央断面でも焼土を15cm~20cmの厚さで確認している。南壁近くで確認されたサンドウィッチ構造、焼土の厚さ、焼土と炭化材の密着から、この住居は土屋根構造をもつと考えられる。

住居跡の時期は、遺物が下東西遺跡X段階、陣場清里遺跡2期類に的合し、9世紀後半代である。(図15、16、17)

3号住

1号住と重複し、1号住より古い。覆土に土師器片を含む。壁から流入で石礫(H3-1 図4)が出土する。1号住にほとんど切られてしまつたため全容は不明である。(図15)

13号、15号住

1号溝、2号溝に切られた方形の竪穴状造構である。双方とも覆土中に焼土の混入は見られる

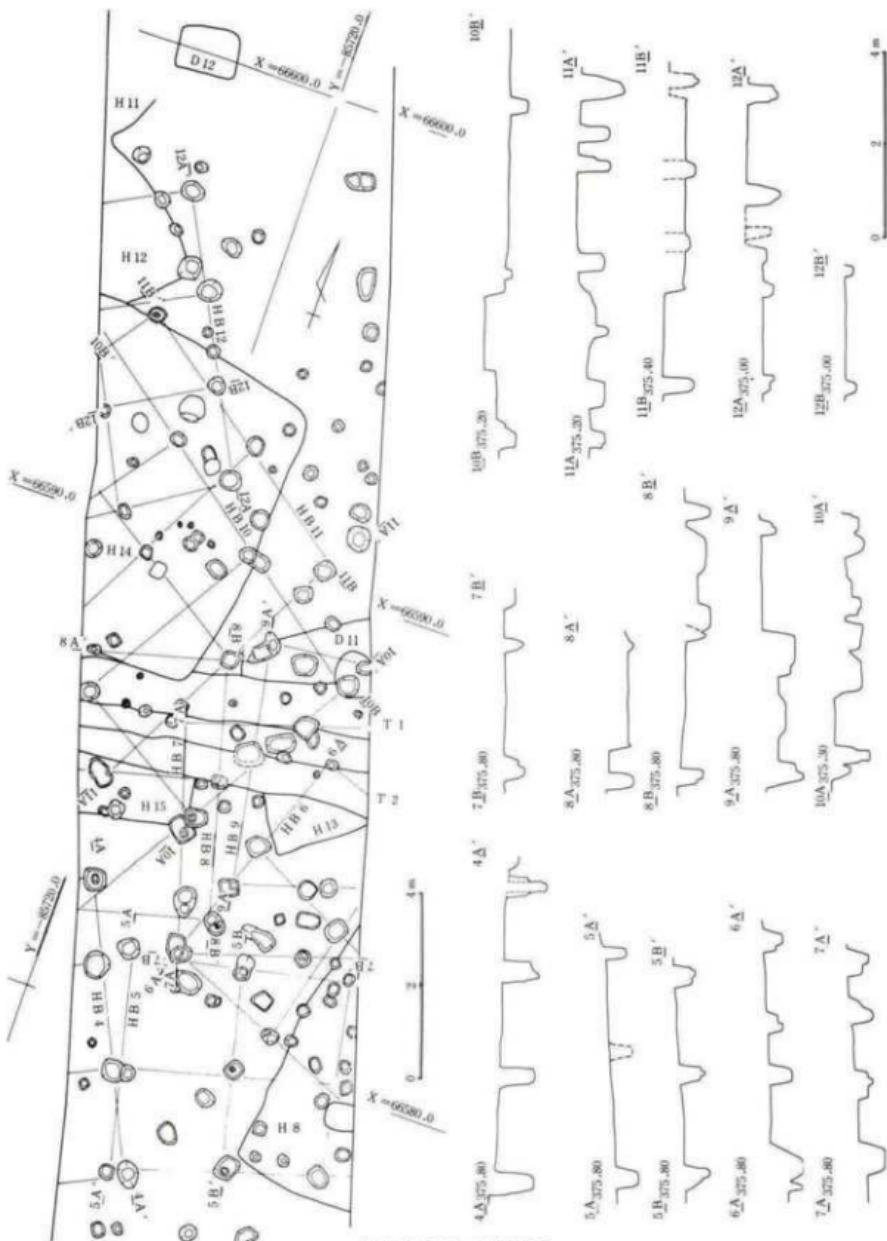


図18H B 4~12構造図

が、かまどの検出はない。完形の遺物はなく覆土中から土師器片が出土するのみである。堅穴住居と考えられるが不明な点が多い。(図18)

5) 中世以降

掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡

C区南側で検出される。確認面はローム上面である。

南北2間、東西2間以上の掘立柱建物である。柱穴間の平均値は東西2.2m南北2.14mである。柱穴内に礎石はなく、柱痕の径は10~15cmである。掘り方は、ゆがんだ円形で深さが確認面から10~25cmである。柱痕と掘り方の間の埋土は、ロームブロックを主に黒色土の混じる、しまった土である。柱痕内の土は浅間B軽石を含むしまった土である。

南北の柱列は軸は北から22°西へ傾いている。

除去した土も含めて、周辺から瓦片が出土しないことから、屋根は草葺き、板葺き、ひわだ檜皮葺きが考えられる。以下の掘立柱建物についても同様のことが言える。

石臼の出土した4号土塙と切り合い、土塙よりも新しい。(図19)

2号掘立柱建物跡

C区南に位置する。南北は1間であり東西は1間以上と考えられる。柱穴間は南北2.6m東西1.65mである。掘り方はしっかりしていて、方形に近く柱痕は円形で径15cm前後である。深さは15~38cmであり、柱穴及び周辺からの遺物はない。南北の軸は北から6°西へ傾く。(図19)

3号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物跡のすぐ北側に位置する。柱間は南北2間で東西は不明である。柱の間隔は平均2.15mを測る。掘り方はしっかりしていて、掘り方と柱痕の区別もはっきりしている。

柱痕は円形で径15cmあり、掘り方は方形に近く深さは36cmである。掘り方埋土、柱痕覆土とも1号2号掘立柱建物跡と同様に浅間B軽石を含む。2号掘立柱建物跡と近接しすぎていることから、2号掘立柱建物跡との同時存在はない。(図19)

4号掘立柱建物跡~12号掘立柱建物跡

南から北まで22mの間に9棟の建物が密集している。

4号掘立柱建物は柱列1列のみの検出である。南北4間であり深さはどれも1m以上と深く、柱痕、掘り方も、他の建物中で最もしっかりしている。柱痕は径20cm近くある。

他の掘立柱建物も、しっかりした掘り方と柱痕をもつ。柱痕には、浅間B軽石と、F Aの混入が認められ、掘り方埋土はロームブロックと黒色土の混土を用いている。

柱列の方向で関連のあるのは、4号掘立柱建物、7号掘立柱建物、12号掘立柱建物のグループ

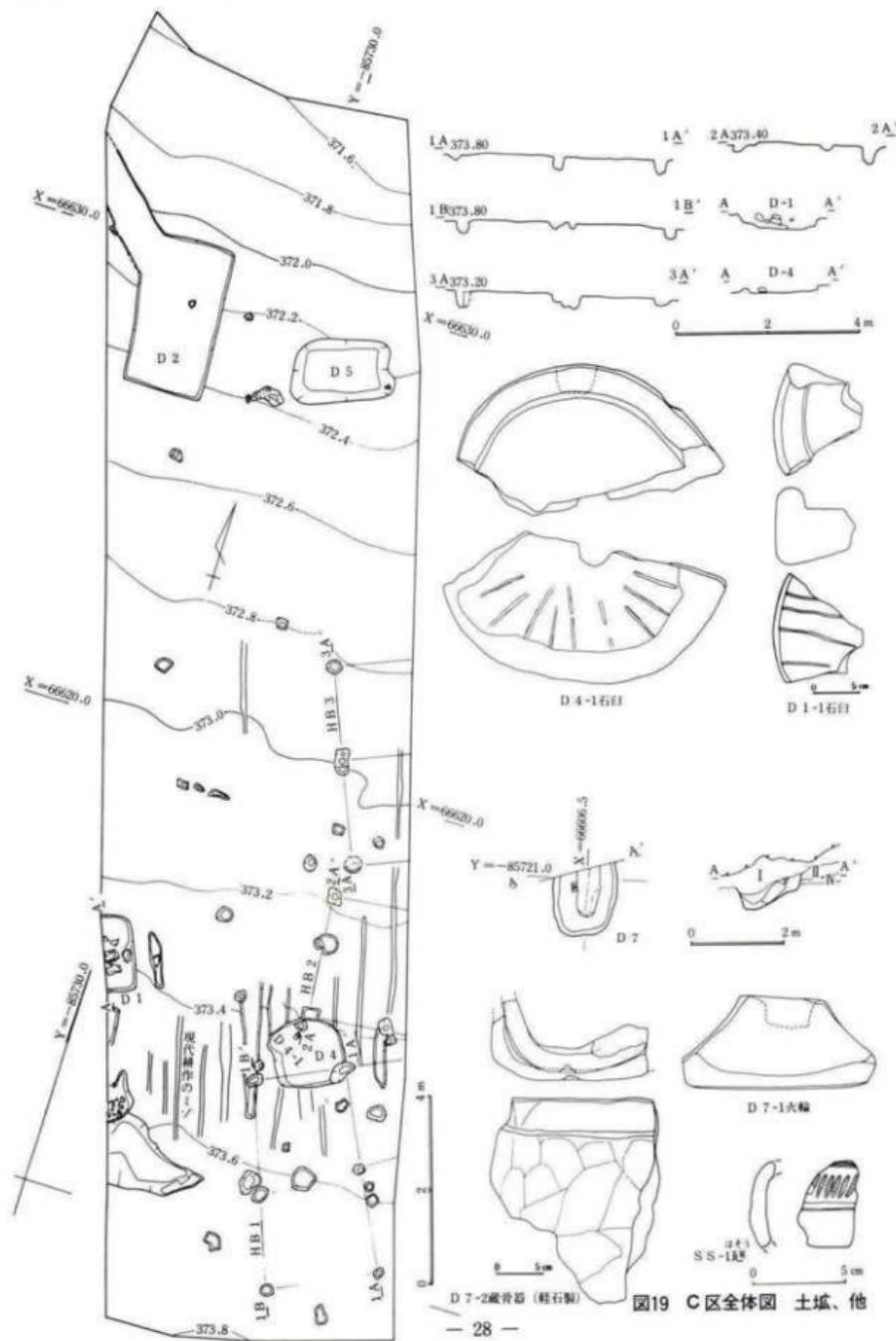


图19 C区全体図 土塙、他

5号掘立柱建物、8号掘立柱建物のグループ、6号掘立柱建物、11号掘立柱建物のグループの3グループに分けられるが、それぞれのグループが同時存在を示す証拠はない。調査面積も狭く、それぞれの関連と全体像は明らかでない。関連する遺物の出土はない。(図18)

1号土塙

全体の寸の調査である。平面形は一辺1.6mの隅丸方形か、隅丸長方形である。深さは確認面から20cmである。底面は2段掘りで、深い方に偏平な角礫を方形に組み合わせる。覆土中から石臼の破片(D 1-1)が出土している。骨片は検出されないが、土塙の基模と形状、副葬品と考えられる石臼から、中世の墓塙と考えられる。他に遺物の出土はない。(図19)

3号土塙

1号土塙同様、偏平な角礫が多い土塙である。礫以外の出土はないが、同様の用途が推定される。(図19)

4号土塙

平面形は円形に近い隅丸方形である。長軸1.5m、短軸1.45mで深さは15cmである。底面はほぼ水平で平坦であり、壁は直立気味に立ち上る。しっかりした掘り方である。覆土は暗褐色土にローム粒がまじり、しまりがある。ロームブロックの集中する層の存在から人為的に埋めたものと考えられる。

底面ぎりぎりのところから石臼が出土している。石組はないが1号、3号土塙同様、中世の墓塙と考えられる。(図19)

7号土塙

平面形は短軸1.4m長軸2m以上の楕円形である。深さは1mあり覆土上層は浅間B軽石を含む暗褐色土、下層がロームブロックの多い暗褐色土である。底面に五輪塔の火輪(D 7-1)があり、上に直方体の大石が、横位で置かれ、その上から火輪が出土している。藏骨器(D 7-2)はカクセン石安山岩(棟名山二ッ岳の軽石)製である。(図19)

13号土塙

13号住の床を掘り込む土塙。平面形はゆがんだ円形で、13号住の床面から10cmの深さである。底面はゆるいすり鉢状で、角礫が底面近くに倒れた状態である。(図18)

2号土塙

長方形で北西コーナーに幅80cmで断面が袋状の溝状造構が接合する。長軸3.35m、短軸1.8mで深さは55cmである。

壁、床ともローム層を掘削して、しっかりしていて、床はかなり削ったかのようにつやかで平坦である。壁に、鋤状工具による掘削痕がある。覆土はロームブロックを主に黒色土が混じり、浅間B軽石をわずかに含んでいる。遺物は土師器片の出土があるが、時期の決定にはならな

い。土層の状態から掘削後、それ程期間をおかずには埋め戻している。

近、現代の茅穴に似ているので、近隣の人々の記憶を確かめたが、掘ったという証言を得られなかった。用途、時期不明の土塙である。（図19）

5号土塙

2号土塙の東に接して、検出した。長軸2m、短軸1.3mのゆがんだ隅丸方形である。

長軸方向は2号土塙と90°異なる。深さは55cmで壁はやや外側に開く。（図19）

6号土塙

B区北で検出した。覆土に浅間B軽石を含む。少しゆがんだ隅丸方形で、長軸2.0m、短軸0.88mを測り、深さは15cmである。掘り方はシャープではないがしっかりしている。用途は不明である。

12号土塙

B区で14号住の北側で検出した。覆土に浅間B軽石を含む。用途は不明である。

6) その他

1号、2号溝

B区中央の最も新しい溝状造構であり、13号住、15号住、掘立柱建物群を切っている。いずれも上面は耕作土に覆われていて、覆土はロームブロックを含む互相を成している。したがって短期間に埋められたことを示すが、用途、時期は不明である。1号溝は上面で幅2m、深さ0.7mあり、2号溝は幅1m、深さ0.95mである。いずれも底面は平坦で底部はU状を呈している。

3号溝

9号住を切る造構で、ごく新しいものである。底面は傾斜していて、覆土にはロームブロックが混じり互相を成す。

他に、近代の造作で、円礎を溝状につめた暗渠を3地点で確認している。礎の間には陶器がはさまっている。山麓に湧水点があり、大雨が降ると野水が出ることから、それを避ける配慮からであろう。

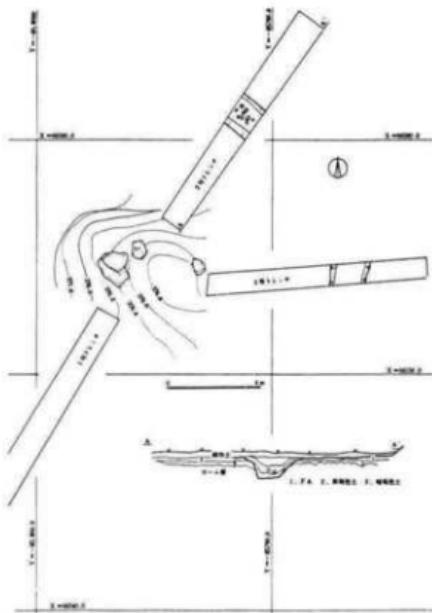


図20 1号墳 z4b

トレンチから関連する遺物の出土を見ないが、周辺の表探で鉢片（SS-1、図19）を採取している。

他にトレンチ調査で北東に平安期の住居跡を確認した。

7) 古墳

下尻高1号墳（仮称）

現況ではわずかの高まりが残り、大きく偏平な角礫がころがっている。現在でも「雷電様」「石宮」として祀られ、頂部には元禄期の小祠がある。

上毛古墳綜覧には未記載である。

ほとんどが畠地になり削平を受けていて残りは悪い。3本のトレンチを入れ周溝の確認のみにとどめた。

周溝の幅は1.5mから2mで深さは70cmである。

周溝から推定される基盤は径12mである。名久田8号墳同様にF.A層を基盤にしている。

石室は完全ではないだろうが、小祠の下に残存していることが、コンタライン等から期待される。
（付）

IV 管田遺跡

1. 基本土層

管田遺跡は、名久田川の河岸段丘上にある平坦地である。基本的な層序は下尻高遺跡と変りないが、古記録に見える通り、洪水が頻繁に起ったところで、土層にもその証拠を見る事ができる。とくにA区が不安定でFA降下後、数回にわたり、大きな洪水が起つたことが推察される。A区はFA下は湿地の腐植土層で、B区ではFA下の黒色土とわずかにロームがある。下尻高に比べ、FAの多いのが特徴である。

基本的な層序は左記の通りである。
※(1)「遺跡の地理的、歴史的環境」参照

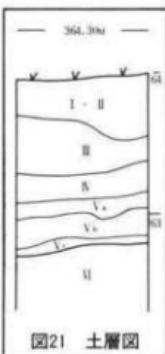


図21 土層図

- I・II層 暗褐色土、耕作土、浅間B
軽石が混じる。
- III 層 砂層、径5cm~15cmの円礫
- IV 層 砂礫層、径2~5cmの円礫と砂
- Va層 暗灰色シルト層、FAの流れ込みによる2次堆積。
- Vb層 うぐいす色シルト質FA。
- Vc層 黄色FA。
- VI 層 黒褐色土、粒子細かく粘質。

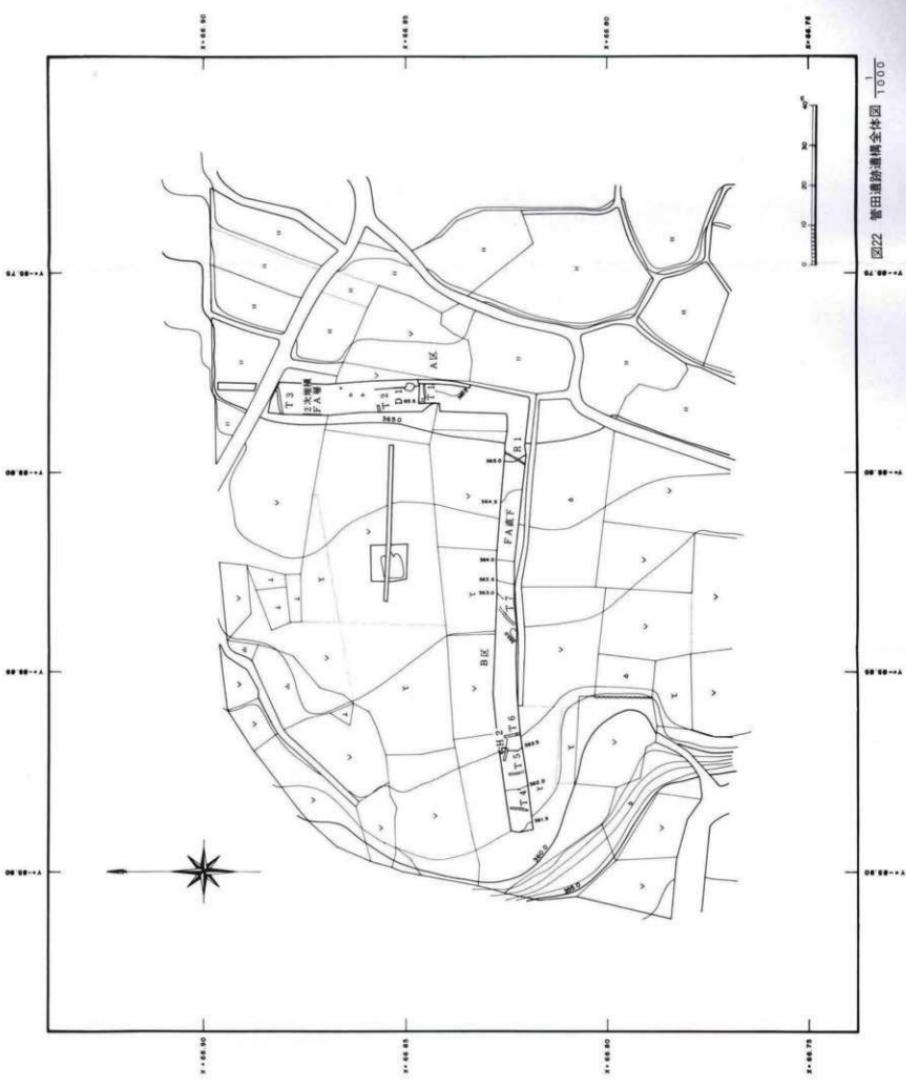
2. 調査の概要

調査区は南北道路予定地をA区、東西をB区とした。造構は、平安期の住居跡3棟と、溝状造構7、土括1基である。A区は湿地で2次堆積のFAと礫層が厚い。B区はA区に比べ乾燥している。(図22)

3. 検出遺構と出土遺物

1) 弥生時代

縄文時代、弥生時代の遺構の検出はない。A区の土層観察で認められるように調査地東側では洪水の影響を受け、こちらでは遺構の検出は望めないだろう。B区では上位に砂礫層が、わずかに残る程度で、やや安定している。2次堆積のFA中から櫛式土器が出土している。(SG-1、図25)



3) 古墳時代

B 区 F A 下でわずかに断面がU字状にくぼむ道状遺構（R 1）と断面V字状の溝状遺構を検出した。

表面採取で円筒埴輪片が1点出土している。（SG-2）、図25）

遺跡周辺で、埴輪を伴う古墳は未調査であるから、表面採取であっても興味ある例である。

4) 平安時代

1号トレンチと、B区で平安時代の住居跡を3棟、検出している。

1号住

1号トレンチで検出した。平面形は張り出しのある隅丸長方形で、長軸4.2m、短軸3.3mである。床面積は13.8m²あり、柱穴はない。主軸は北から82°東へ傾く。

覆土は、主に暗褐色土でFAを含む。覆土の上には、円礫と浅間B軽石の混じりの層がのっている。

壁高は50cmである。床はローム上面まで掘り込み、貼床である。中央部が最も硬く、全体はやや硬い程度である。北、南壁はなだらかに立ち上り、西壁はほぼ直立する。

かまどは東壁の中央にほぼ付設される。両袖は粘土で構築される。石組かまどであり、石材は崩落している。

遺物はかまどの南側に集中している。内黒土器と、土師質土器の壺、鉄鎌が出土している。他に床面から、須恵器甕の破片が、出土している。

遺物の形態から、時期は、9世紀後半から10世紀前半と見られる。（図23）

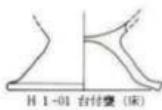
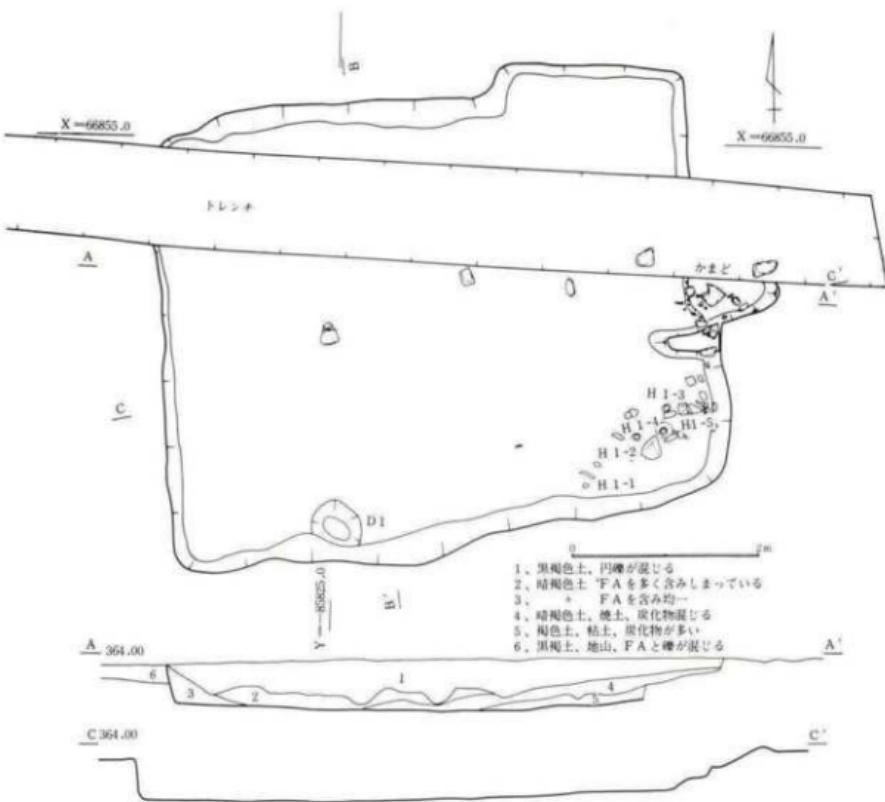
2号住、3号住

2棟の住居の重複で、3号住が新しく、かまどのみの検出である。

2号住は調査区の北側に接したため以下以下の調査である。一辺が3.9m基模の方形の豊穴住居跡と推定される。

覆土は暗褐色土にFAの粒子を含む。最下層の上面は硬く、その上に遺物が廃棄されている。

東壁の調査区との接点で、粘土のブロックと焼土が多量に見つかり、それがかまどの構築材である可能性は高く、かまどは東壁の北寄りに付設されると考えられる。東かまとすると、主軸は北から92°東へ傾く。

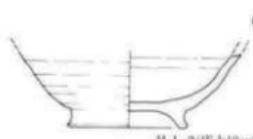


B 364.00 トレンチ

B'



0 2m



高台は、はがれ
その後削耗

図23 H 1造構図

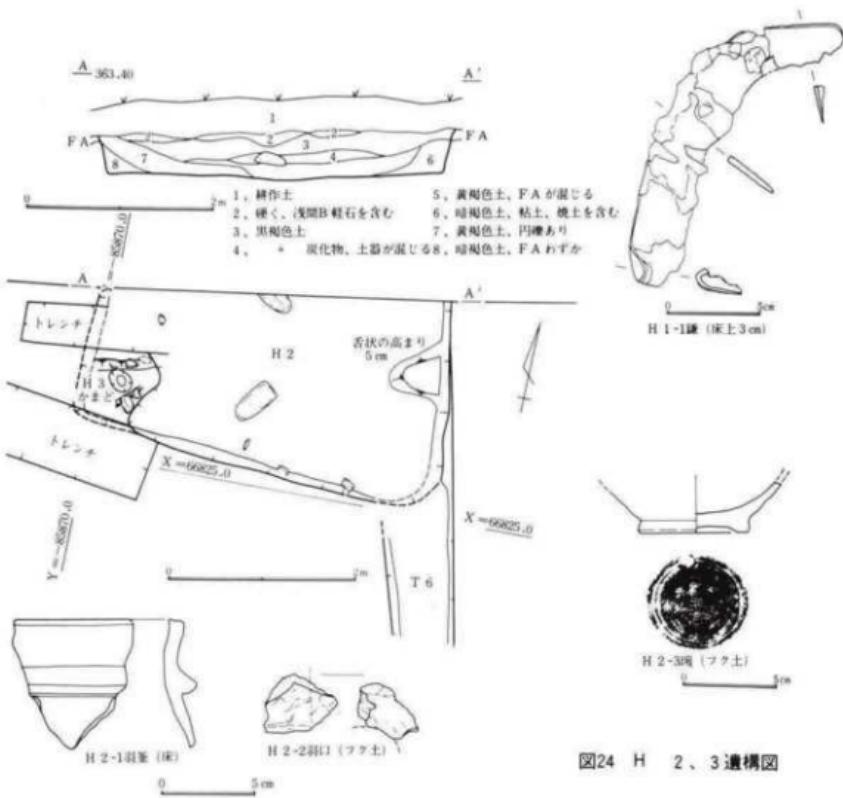


図24 H 2、3 遺構図

壁高は55cmある。床は赤味がかった褐色土で、貼床はなく、全体にやや硬い。東壁について、舌状の盛り上りがあり上面は硬い。

床面密着で還元炎焼成の羽釜の破片が出土している。他は、須恵器（？還元炎焼成であるが、土師質土器系か）の环、塊類の破片と土師器變の破片が混じっている。溶解したガラス質の付着した羽口の一部が出土している。

遺物から10世紀後半代の住居跡である。

3号住は壁、床ともに検出できず、かまどの底面のみの検出である。石組かまどであるが、ほとんど崩れている。火床部が焼化化している。出土遺物は流れ込みで、縄文土器が一片出土したのみである。（図24）

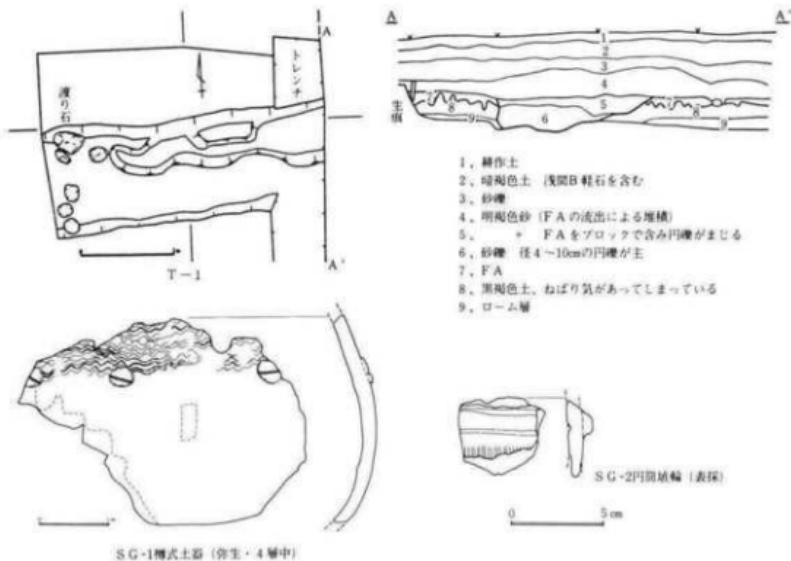


図25 T-1 遺構図、弥生土器、円筒埴輪

4) その他の遺構、遺物

1号土塙

A区の中央で、FAの2次堆積火山砂の上に構築されている。

長軸2.1m、短軸1.9mの隅丸長方形で深さは10cmである。用途を示す遺物は無く、底面近くより多くの炭化材を検出した。

1号溝

A区で検出した幅2.2m、深さ50cmの溝状遺構である。FA層を掘り抜き、礫を含むローム層まで達している。断面は北が立ち上り、南はなだらかである。西側に大きな亜円礫をおき、渡り石にしている。溝は人工か自然かは不明である。

溝中の覆土から縄文後期、弥生後期、古墳時代前期、古墳時代後期の土器片が出土し、いずれも表面が磨耗し、流されてきたことを示している。

2、4、5、6溝

2号、6号溝は幅60cm前後で、深さ30cmの溝状遺構である。覆土に浅間B軽石を多量に含む。

断面は平坦で壁がわずかにオーバーハングする。4号、5号溝は、浅く、浅間B軽石を含む溝状造構である。

いずれも用途、性格は不明である。2号、6号溝のように、浅間B軽石を土と同量以上に含む溝は、浅間B軽石排除の行動をうかがわせる。

3号溝

幅60cmで長さは不明の溝状造構である。溝の中には円礫がぎっしりつまっている。用途、性格は不明である。

Vまとめと考察

今回の平遺跡群、下尻高遺跡、管田遺跡の調査で、弥生時代後期から中世までの遺構を確認することができた。また遺物は、縄文時代前期から、近代まで豊富に出土した。竪穴住居跡は下尻高遺跡で、弥生時代 2 棟、古墳時代前後各 2 棟、奈良時代 3 棟、平安時代 4 棟、不明 2 棟（平安時代か？）を検出し、他に中世以降の掘立柱建物群、土塁を調査した。管田遺跡では、平安時代の竪穴住居跡 3 棟を検出した。

踏査時点では、遺物の地表面散布は管田遺跡が多く、遺構も集中すると考えたが、結果は予想と反対であった。その原因も、調査の中で判明した。

以下、今回調査の成果と問題点を下尻高遺跡を中心に述べてみたい。

古墳時代前期

前期の竪穴住居跡は、大塚宿割遺跡で調査されているが、S 字口縁台付甕を伴う竪穴住居跡は中之条町において、初めてである。また吾妻郡内においても、S 字口縁の破片は採取されているが、遺構はあまりないと言われていた。吾妻郡及び、中之条町における古墳時代の幕あけの解明と弥生時代の文化が次代にどう変っていくのかを解明する資料となる。S 字口縁台付甕の破片は今回調査区を含め、かなり散在していて、前期遺構が他にも存在することを示している。前期の墓域、生産域との関連も、今後の課題となろう。

石組かまど・石組煙道付かまど（古墳時代後期）

古墳時代後期から終末期に位置する。石組かまどと石組煙道付かまどの類例は表 1 のようになる。（燃焼部まで、第 1 段の石列が断続なく伸びるものを石組かまど、煙道部のみでとどまるのを石組煙道付かまどと区別した。）他に吾妻町川戸遺跡、草津町井堀遺跡に類例が見られる。『姉山石組かまど』で井上唯夫氏が言うように、分布は吾妻郡に濃いが、利根川右岸のみならず、左岸にも分布している。石組煙道付かまどは田中田遺跡 S2A 号住、下尻高遺跡 2 号住で、石組かまどは、三原田城遺跡 5 号住居址、姉山石組かまど、法満寺 A 遺跡（？）である。両グループとも、それぞれ規模が近似している。出土土器の比較から、石組煙道付かまどが先行している。いずれも石積みは精巧であり、ミニチュア版の石室を思わせる。早い段階とみられる、下尻高 2 号住では側壁の持ち送り構造まで認められる。古墳時代のある段階で石室築造技術が住居施設にとり入れられ、石組煙道付かまどとなり、その後、石列が燃焼部まで伸びて石組かまどとなり、後の利根川流域と吾妻地方に多い、奈良、平安時代の石組かまどへと変化していくと想定している。しかし、田中田遺跡のように石組煙道付かまどと、素掘りの煙道をもつかまどが、さほどの時間差がなく併存する例や、三原田城遺跡のような、特殊なかまど使用を思わせる例などがあり、その変遷はかならずしも単純ではない。中之条町で古墳後期住居跡の調査例が増

表1 長さ、幅は内法である。

道路・造構名	燃焼部①長さ 煙道部②幅	火床の状態	袖の状態	燃焼部から 煙道部の段差	煙道部①長さ② 幅③高さ④勾配	備考 住居規模地
1. 田中田跡跡②A号住 (富士村) 石板埋設付かまど	①60cm ②40cm	わずかにくぼむ	粘土で構築	8cm	① 140cm②36.5~29cm ③ 20cm④4°	側壁3石1段、天井石4石、煙出孔13cm ×21cmの方形。住居跡は5.5×5.9mの 方形。かまどは西壁面よりに付設。
2. 三原田城跡 5号住居跡 (本郷村) 石板かまど	① 100cm ② 50cm	全体にくぼむ 塵土なし	石列の延長 2石1段	20cm	① 100cm②45cm煙出孔に 行くにはたがつてすばま ③ 30cm④3石~4石 12°その後水平	側壁2石1段、天井石1石(現存) 住居跡は5.2×5.6mの方形。かまどは 東壁面よりに付設。短期の使用で人為的 に擴す。
3. 猿山石板かまど (西野町) 石板かまど	①75cm ②42cm	アの勾配	石列の延長 2石1段 (3石目までが 燃焼部)	無し	① 100cm②27cm~20cm ③ 27cm④4石目で20° 以後10°	側壁3石1段、天井石不規格(1次調査は 有り)全体で7石建行。煙出孔15cm四方。 住居規模不明。北壁に付設。
4. 宝鏡寺A遺跡 (中之条町字法華寺) 石板かまど?	約5	—	—	—	① 165cm②48cm~13cm ③ 29cm④三段壁18°	側壁5石1段、天井石1石(現存) 住居規模不明。
5. 下尻高遺跡 2号住 石板埋設付かまど	①73cm ②46cm	アの勾配 深度4cmの くぼみ、 わずかに塵土	ロームと粘土の 塵土で構築 瓦張めを複数之 し、埋め込む。	20cm	① 140cm②20cm~16cm ③ 35cm~40cm④10°	側壁5石3段構え、天井石5石(推定6 石)煙出孔14cm四方。住居跡は5.4× 5.4mの方形。東壁面よりに付設。人為的 に擴す。

※1 「富士見溝跡群、田中田跡跡、深谷河岸跡、見附跡」1980富士見村教育委員会

※2 「三原田城跡、八崎城跡、八崎塚上青葉遺跡」1987日馬県教育委員会、群馬県文化財調査事業団

※3 「県指定史跡猿山石板かまど」荒廢整備と再調査による新見知 西野町教育委員会

※4 「中之条町立第1季」 1976中之条町立編纂委員会

※5 住居跡の調査は行なわれず、燃焼部と煙道部の区別がはっきりしない。

数値は、煙道部のみと假定しての値である。

えれば、明らかになるであろう。また文化圏、分布範囲の検討をするには、調査例が少なく不明な点が多いと言える。今後、類例の増加により、あらためて、検討すべき課題であろう。

平安時代の土屋根

火山災害により、古墳時代の集落が軽石や火山灰ですっぽりと覆われた子持村黒井峯遺跡、^{※1} 津川市中筋遺跡で竪穴住居跡に土屋根が発見されたことから、調査に改たな視点が加わった。同じく津川市空沢遺跡第7次調査で、平安時代(11世紀)の土屋根が確認された。断面で、焼土の厚みが30cmあり、スサを入れた粘土や小骨を含む動物の骨の混入が観察された。垂木や屋根の下地は炭化した状態で検出されている。

調査担当者は、スサを入れた粘土から塗り屋根とし、古墳時代の土をのせる土屋根から塗り屋根に発展したことにより屋根勾配を大きくしたとともに、土を厚くすることに成功したとしている。また豊後風土記、常陸風土記を引いて、「九州を含めた日本全体に、土屋根を持つ竪穴住居の存在した可能性」を指摘している。下尻高遺跡1号住では竪穴住居跡全体に焼土が厚く堆積し、焼土の上に白色灰化したカヤ?と、焼土下に炭化したカヤ材、垂木が残るサンドウイッチ構造を確認したことから、土屋根と認定した。焼土中にスサや獸骨はなく、土を草木がはさむ中筋遺跡でみられるサンドウイッチ構造に似ている。垂木方向が壁と平行していることから、切妻屋根と想定され、下地にはカヤのみでなく板材も用いている。土屋根の系譜に9世紀後半代の資料を

追加したことになる。

炭化材の多いことから、木製用具の出土を期待したが残念ながら無かった。

以上が主な問題点と成果であるが、他にも掘立柱建物群の性格、土塙墓の性格と背景など、まだ解明すべき点が多い。また遺跡地内に阿弥陀堂があったという伝承があるが、今回調査ではそれに関連する遺構、遺物は発見されなかった。

調査で、遺跡の中心地は、調査区の西側のゆるやかな舌状の傾斜地と推定され、縄文時代前期から近世までの複合遺跡と確認された。

また管田遺跡は、一部に遺跡でないという意見もあったが、平安期の住居跡3棟を検出し遺跡であることを裏づけた。

出土遺物は各時代を網羅し、中之条町及び吾妻郡内の指標になるものも多く含まれている。今回の整理作業で充分な分析のできなかったことを反省し、課題としたい。

また生産域、生活域、墓域等の考察や内容の不充分さは、ひとえに筆者の力量不足と責任であり、本報告書の不備なところの指摘、助言をお願いします。

今回の成果をふまえて、さらに発展させることを、今後とも努力したい。

※1『風井峯遺跡発掘調査概報』子持村教育委員会1987.6

※2『中路遺跡発掘調査概要報告書』渋川市教育委員会1987.3

※3『空沢遺跡第7次』渋川市教育委員会1988.3

VI 管田遺跡、下尻高遺跡の火山碎屑物

1. 調査の目的

群馬県には多くの火山が分布しており、丘陵や段丘上にはそれらの火山を起源とする火山灰土壌が厚く堆積している。火山灰土壌のなかには多くの軽石層や火山灰層が挟まれている。これらは離れた地層の対比に有効であるうえ、噴出年代がすでに明かになっている場合、地層の年代を推定する道具となる。このような地質学的な手法は「火山灰編年学（テフロクロノロジー）」とよばれ、地質学のほか地形学や考古学などに盛んに利用されている。火山灰編年学の上で鍵となる軽石層や火山灰層は、「示標テフラ層」とよばれている。「テフラ」は火山学用語で、軽石や火山灰などの火山碎屑物の総称である。群馬県内では特に示標テフラの数が多く、群馬県はわが国で最も火山灰編年学が盛んに行われている地域の一つである。

中之条町の平遺跡群においても、各遺跡の土層断面中に肉眼でテフラ層を確認することができた。テフラ層を示標テフラと対比させるためには、まず野外において層相や層厚などを調査する必要がある。今回の分析では野外調査を中心に行い、採取した試料については超音波洗浄後、実体鏡下で特徴を観察した。

2. 調査結果

管田遺跡

管田遺跡の代表的な土層断面の柱状図を図1に示す。断面の堆積物の連続には二つのパターンが認められた。一つは黒ボク土の中に上位より軽石の2次堆積物（層厚36cm、軽石の最大径9mm）とシルト層（層厚4cm）が挟まれているもの（A）、もう一つは黒ボク土の中に上位より亜円礫層（層厚25cm、礫の最大径120mm）とシルト層（層厚24cm）が挟まれているもの（B）である。下位にあるシルト層は層相から同一堆積物であることが解る。しかし上位の亜円礫層と軽石の2次堆積物との層位関係については不明である。

実体鏡下での観察によれば、軽石の2次堆積物に含まれる軽石は、褐色のものが多く暗灰色の石質岩片が多く含まれている。また斜方輝石と単斜輝石が多く含まれていることも明かとなった。これらの特徴から本堆積物に含まれる軽石は、1108年（天仁元年）に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B）に由来していることが明かとなった。

下位のシルト層はいくつかのユニットから構成されている。ユニットの中には最大径18mmの白色軽石粒が含まれているものがある。軽石はスponジ状に細かく発泡しており、普通角閃石の斑晶が認められる。この軽石は6世紀初頭と6世紀中葉または後半に生じた榛名火山の2度の噴火の際に放出されたものと非常に良く似ている。前者の噴火ではF Aとよばれる降下火山灰F P F-1とよばれる火碎堆積物（火碎流はテフラがガスとともに高速で流走する現象を指す）、後者の

噴火ではFPとよばれる降下軽石層とFPF-2とよばれる火碎流堆積物が噴出した（新井、1979）。最近、早田（1988）はそれぞれのテフラの総称として“Hr-S”と“Hr-I”的名称を提唱している。これらの2度の噴火で放出された軽石は非常に良く似ており、現在のところ軽石だけでは区別することができない。ただし分布の広域性から考えると、管田遺跡のシルト層はHr-S起源の可能性が大きい。

下尻高遺跡

下尻高遺跡の模式的な土層断面の柱状図を図2に示す。断面中には上位より、黄褐色の降下軽石層（層厚5cm、軽石の最大径12mm）と黄褐色の砂質シルト層（層厚3cm）が確認できた。上位の軽石層に含まれている軽石は褐色で、暗灰色の岩片が多く認められる。また斜方輝石と单斜輝石の遊離結晶が認められる。これらと特徴から本テフラ層は、As-Bに対比することができる。一方下位のシルト層は、白色粗粒の軽石は含まれていないものの、普通角閃石の結晶が多く認められ、管田遺跡の下位のシルト層同様Hr-SかHr-I起源の可能性が考えられる。

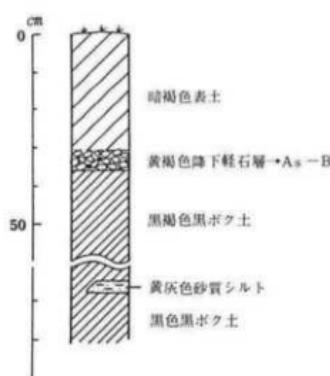
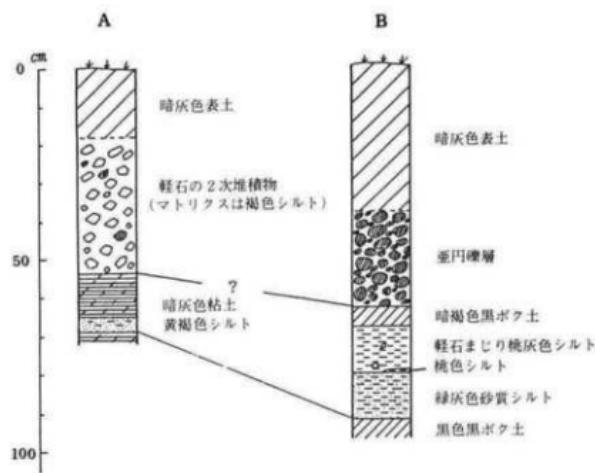
3. 考察

管田遺跡および下尻高遺跡では、As-Bとその2次堆積物およびHr-SあるいはHr-Iの2次堆積物が発見された。2次堆積物のテフラは、厳密な意味では1次堆積の示標テフラとは同等に扱うことはできない。しかし今回発見された2次堆積物中には、それぞれのテフラに由来する本質物質が非常に多く、示標テフラの噴出年代にかなり近い堆積年代をもつと考えて良い。

早田勉（パリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層、考古学ジャーナル、157、41-52。
早田 勉（1988）中筋遺跡のテフラと火山災害、中筋遺跡-第2次発掘調査概要報告書、35-41。



写真図版



下尻高遺跡調査スナップ



H—7 (古墳時代) H10 (弥生時代) 全景 内側がH10



H 1-1 斧



H 1-2 斧



H 7-4 凹石 (縄文時代)



H 7-1、2 短頸壺 (古墳時代)



H14-1 高環



H14全景 北から 石のあるくぼみが切



SS-1 鮫

下尻高遺跡全景 (空中写真)



H 8 全景南から



H 8, 3, 4 出土状態



H 8-1 小型壺



H 8-2 砧石



H 8-3



H 8-4

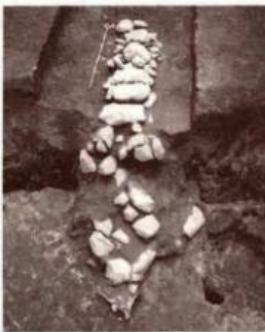
S字状口縁台付甌



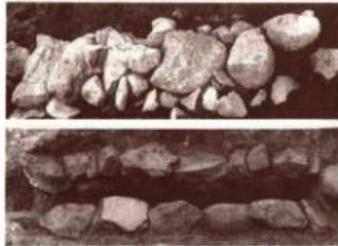
H 9 全景古墳時代前期



H 2 全景南から 古墳時代後期



かまど検出状態



石組埋道、天井石と側石



煙出し孔



H 2-K 2 かまど袖に使用



H 2-6



H 2-K 1 かまど袖に使用



H 2-4、5 長胴甌



H 2-1、2 刀子



H 2-K 3 坯



H 2-02 坯



H 4-K 1 妻



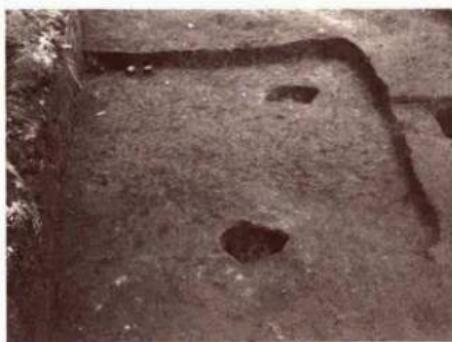
H 4-1 須恵ふた



H 4-2 带金具 H 4-01 带金具



H 4、5 全景



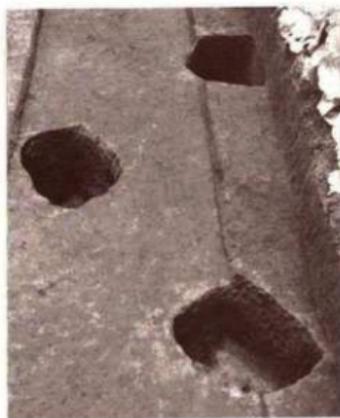
H 6 全景北から



H 6-01 須恵ふた

H 6-4、5 环暗文

H 6-3 环明皿



D 8、9、10、古墳時代

D 4 中世

D 7 中世



D 4-1 石白



D 7-2 藏骨器



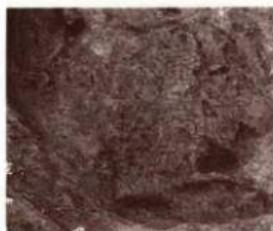
D 7-1 五輪塔火輪



H 1 焼失住居跡全景西から



かまど南 土器出土状態焼土の上



板材棚か屋根か



垂木と横木の組み合せ状態



H 1-1甕



H 1-24灰釉瓶



H 1-57灰釉瓶



H 1-01甕



H 1-05把手付甕



H 1-5小型甕



縸出土状態



縄と折り曲げたカヤ？



H 1—03 墨書土器



H 1—4 塼



H 1—7 塼



H 1—14 墨書土器



H 1—9 墨書土器



H 1—6 塼



H 1—11 「洪武通寶」



B 区掘立柱建物群



H12—2 鎌



H11—1 灰釉埢



H12—1 刀子



管田遺跡全景（空中写真）雨の後、水がでる。右下が鶴塚古墳



F A 層(下)と砾層



T 1 左に置き石がある



S G - 1 弥生土器



H 1 西から



H 1-1 出土状態



H 1-5 残



H 1-1 鎌



H 1-4 盆



H 2、H 3 かまど南から



調査参加者

平遺跡群
下尻高遺跡、管田遺跡

1988.12

昭和63年12月21日印刷

昭和63年12月23日発行

発行 中之条町教育委員会

編集 群馬県吾妻郡中之条町大字中之条町1091
TEL 0279-75-2111㈹

印刷 (有)孔文社印刷